睡蓮

――故松井源吾工学博士を偲ぶ――

松井政枝　編

睡　蓮

――故松井源吾工学博士を偲ぶ――

松井政枝　編

95 3 5

目　次

通夜式 …… 1

葬儀・告別式 …… 15

惜別の詞・訃報 …… 33

叙　勲 …… 70

偲ぶ会 …… 72

納　骨 …… 83

獅子ヶ城会館竣工 …… 87

一周忌 …… 99

思い出 ……101

松井源吾先生（田中輝明） ……104

三回忌のあいさつ（菊竹清訓） ……107

あとがき

故松井源吾略歴

早稲田大学名誉教授

故 松井 源吾 儀 通夜式

日　時　平成8年1月18日（木）

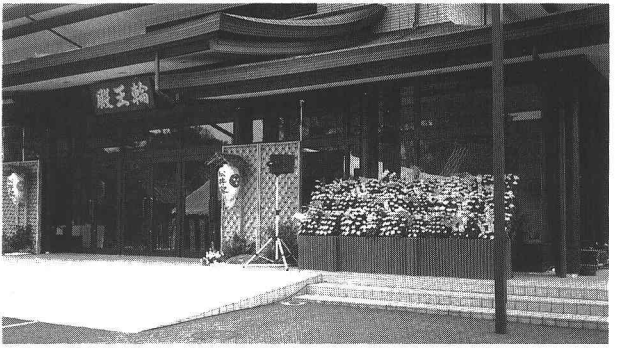
時　間　午後6時～7時

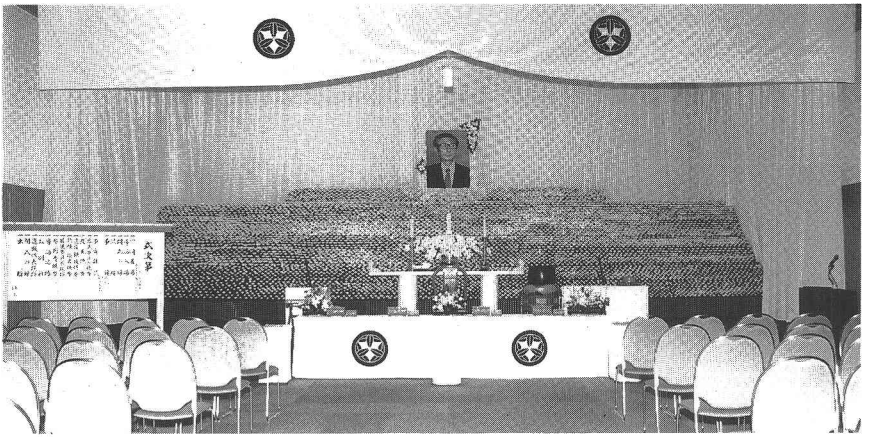
場　所　於、台東区上野公園　寛永寺輪王殿

導　師　日蓮宗　圓静寺ご住職様

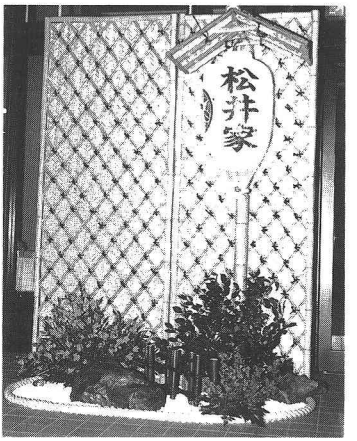
理深院殿広博日源大居士

2





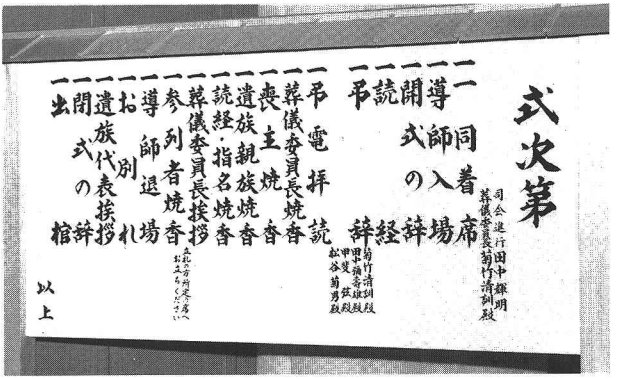
祭壇飾



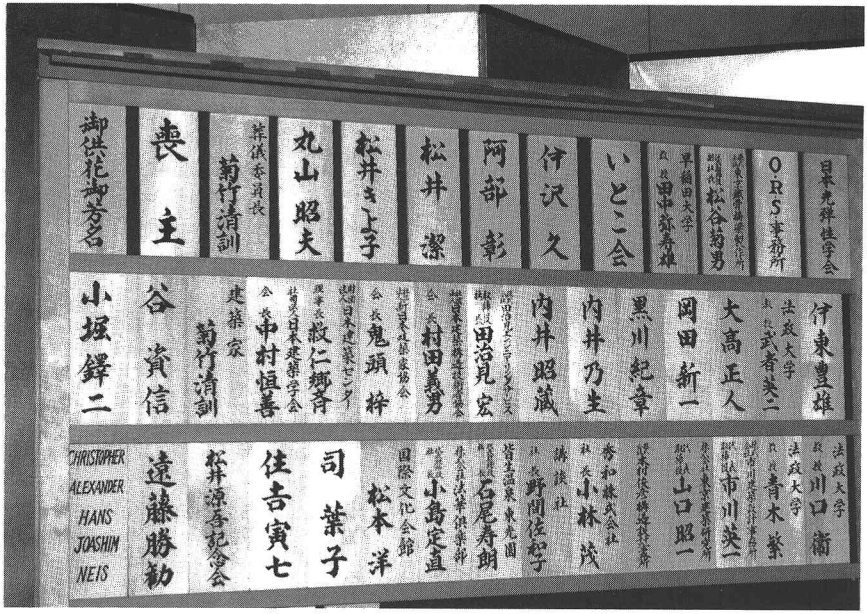
電灯飾

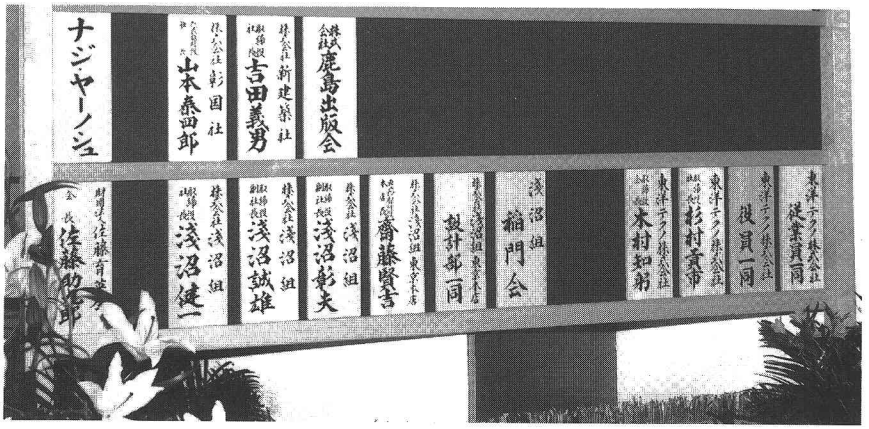
建設会社関係
設計事務所関係
大学関係
受付
受付
受付

親戚関係
一般関係
大学関係
受付


式次第
司会進行 田中輝明
葬儀委員長 菊竹清訓殿
一 同着席
一 導師入場
一 開式の辞
一 読経
一 弔辞
菊竹清訓殿
田中輝秀殿
甲斐弦殿
松谷菊男殿
一 弔電拝読
一 葬儀委員長焼香
一 喪主焼香
一 遺族親族焼香
一 読経・指名焼香
一 葬儀委員長挨拶
一 参列者焼香
一 導師退場
一 お別れ
一 遺族代表挨拶
一 閉式の辞
一 出棺
以上

御供花


日本光弾性学会
O.R.S事務所
松谷菊男
早稲田大学
田中弥寿雄
いとこ会
伊沢久
阿部彰
松井潔
松井きよ子
丸山昭夫
菊竹清訓
喪主
御供花御芳名
伊東豊雄
法政大学
武者英二
大高正人
岡田新一
黒川紀章
内井乃生
内井昭蔵
田治見宏
村田義男
鬼頭梓
救仁郷斉
中村恒善
建築家
菊竹清訓
谷資信
小堀鐸二
法政大学
川口衛
法政大学
青木繁
市川英一
山口昭一
秀和株式会社
小林茂
講談社
野間佐和子
石尾寿朗
小島定直
国際文化会館
松本洋
司葉子
住吉寅七
松井源吾記念会
遠藤勝勧
CHRISTOPHER
ALEXANDER
HANS
JOASHIM
NEIS


ナジャーノシュ
鹿島出版会
新建築社
吉田義男
彰国社
山本泰四郎
東洋テクノ株式会社
従業員一同
東洋テクノ株式会社
役員一同
東洋テクノ株式会社
杉村貴市
東洋テクノ株式会社
木村知躬
浅沼組
稲門会
設計部一同
齋藤賢吉
浅沼組
浅沼彰夫
浅沼組
浅沼誠雄
浅沼組
浅沼健一
佐藤助郎

早稲田大学 村野会
早大建築科二十七年卒業生
みなわ会一同
珊瑚会
早稲田大学理工学部 建築学科 昭和22年卒業生一同
早稲田大学建築学科 二八会
早稲田大学専門学校 稲芽会
稲門建築会 名古屋支部
早稲田大学 稲門建築会 会長 櫻井清
早稲田大学 理工学部建築学科
早稲田大学専門学校 校長 戸沼幸市
早稲田大学理工学部 建築学科 昭和22年卒業生一同
所長 尾島俊雄
早稲田大学 理工学部 建築学科 昭和22年卒業生一同
長 大井喜久夫
早稲田大学 理工学部 建築学科 昭和22年卒業生一同
早稲田大学 理工学部 建築学科 昭和22年卒業生一同
奥島孝康
早稲田大学

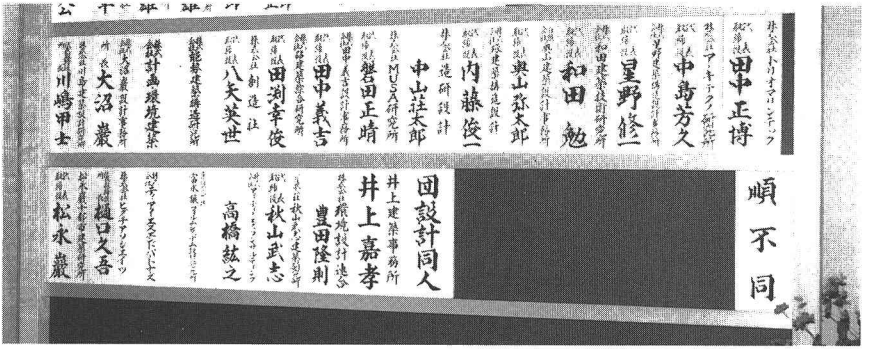
株式会社 大林組 取締役社長 津室隆夫
株式会社 竹中工務店 社長 竹中統一
大成建設株式会社 取締役社長 山本兵蔵
清水建設株式会社 社長 今村治輔
鹿島建設株式会社 取締役社長 宮崎明
国士舘大学 輝友会
多摩美術大学 建築研究室一同
理事長 大沼淳
文化女子大学
中部大学
多摩美術大学
関東学院大学 学長 鴻池淳志

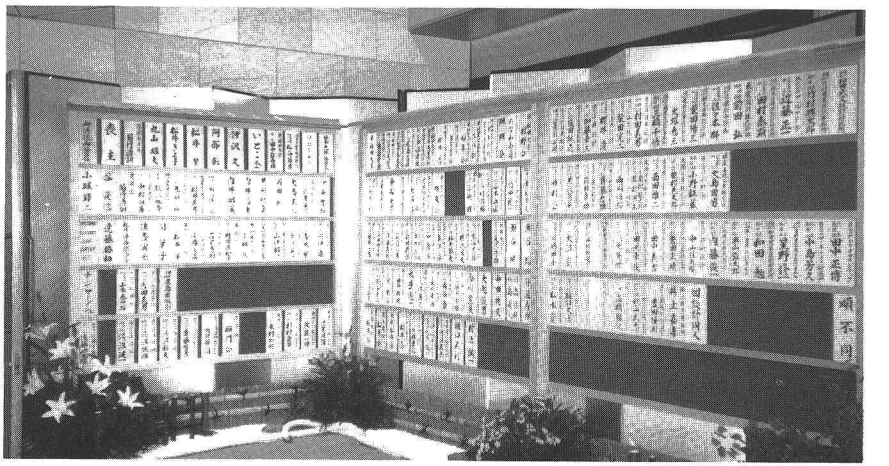
瀬谷均
瀬谷胖
日本大学 名誉教授 矢代秀雄
株式会社 熊谷組 取締役社長 熊谷太一郎
大成建設株式会社 取締役社長 横沢国夫
大成建設株式会社 取締役社長 福士勝夫
鹿島建設株式会社 取締役社長 蟹江淳
鹿島建設株式会社 取締役社長 中島隆
不動建設株式会社 取締役社長 武村健
前田建設工業株式会社 取締役社長 市吉正信
前田建設株式会社 社長 前田靖治
錢高組 社長 錢高一善
佐藤工業株式会社 社長 佐藤嘉剛
戸田建設株式会社 取締役社長 戸田順之助
株式会社 フジタ 取締役社長 藤田一憲

守道寿雄
川島民親
川島眞人
中田捷夫
大越俊男
今川憲英
株式会社 風工学研究所 取締役社長 藤井邦雄
早稲田大学 教授 西谷章
東京工芸大学 教授 田村幸雄
関東学院大学 教授 入江善久
永井亮一
国士舘大学 教授 田中輝明
東京大学 建築工学科 教授 宋皓山
関東学院大学 大学研究所 教授 槇谷栄次
愛知工業大学 教授 小高昭夫

村上誠一
樋口武利
日産建設株式会社 竹波正洪
佐藤工業株式会社 関東支店 永井慎一
株式会社 間組 取締役社長 紅林康信
竹中工務店 松井会
大成松井会
清水建設 松井会
鹿島建設 松井

順不同


順不同


順不同

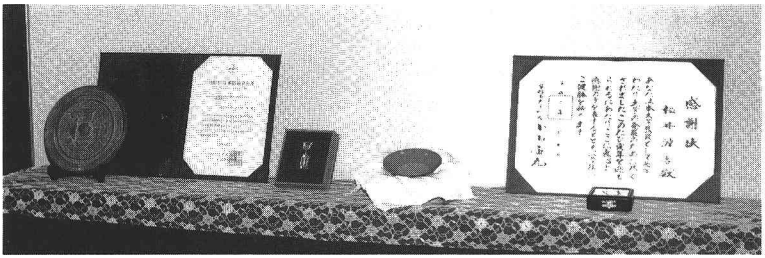
導師入場

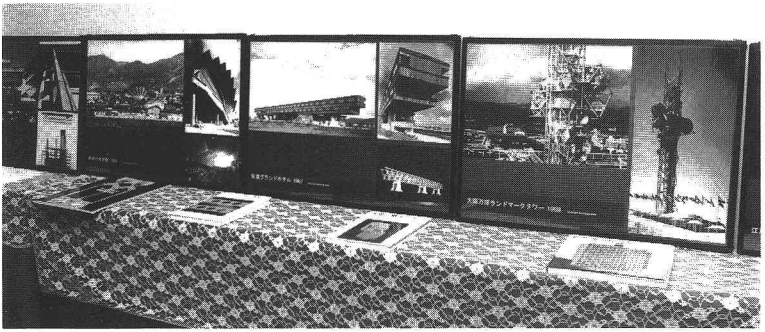
焼　香

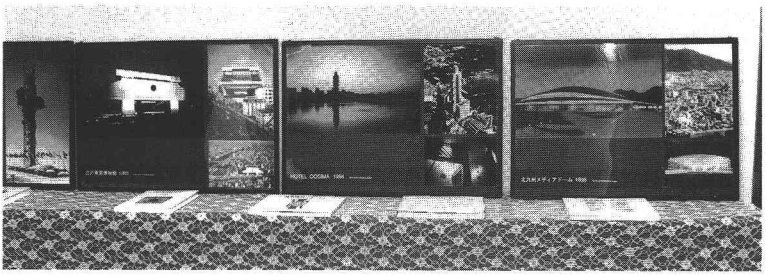
導師退場
お別れ
遺族代表
開式

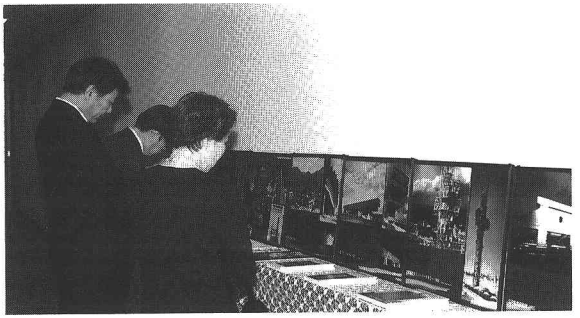
12

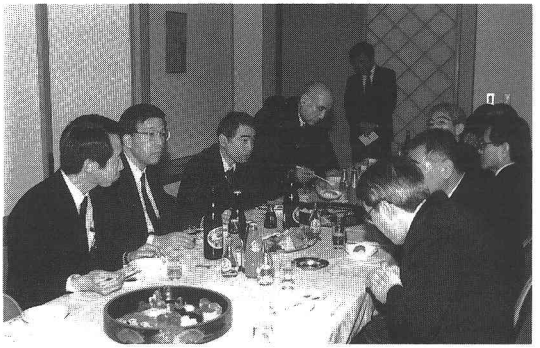
導師退場

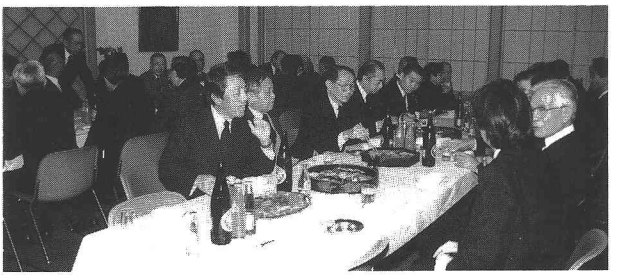

感謝状











通夜　お清め

早稲田大学名誉教授

故 松井 源吾 儀 葬儀、告別式

日　時　平成8年1月19日（金）

時　間　午後1時～3時

場　所　於、台東区上野公園　寛永寺輪王殿

導　師　日蓮宗　圓静寺ご住職様

葬儀施行　㈱東京葬祭

弔　辞

弔　辞

菊竹清訓

松井源吾先生、先生は偉大な構造的建築家として、つぎつぎに新しい構造を開発され、理論と実践を通じて、わが国の現代建築の基盤である構造的空間の発展に極めて大きく貢献され、その業績に天才的能力を存分に発揮されました。

四十年にわたって御指導をいただいただけでも、館林市庁舎の壁柱、駿河銀行のボイド構造、米子東光園のサスペンション・スラブ、とりわけ出雲大社庁の舎や京都コンペでのプレストレス超大架構。

海上都市のフローティング構造、海底へのソフトランディンク・システムなど、スチール・コンクリート・膜などカバーされた分野はひろく、多岐にわたり、陸上、海上をこえて、つねに未知の構造的空間への挑戦であったことを知らされます。

また光弾性実験は、力の流れを目に見えるものにして、構造の社会的認識を深め、構造の合理性を追求する道をひらかれ、日本の伝統的木構造の解明に応用されるなど、新しい視野をひらかれました。

膜実験のモアレ法も、そうした中の一つで、この研究から生まれた軸力ドームの開発は、研究と実験の一致した、松井先生の独壇場で、現在北九州マルチドームとして、二年後の完成がまたれます。

早稲田大学では、耐震構造論をひらかれた内藤多仲先生のあと、構造研究室の教授として、多年にわたり学生の指導にあたられ、その間、松井研から二十有余名のドクターをおくり出された、すぐれた教育者であり、また学外では、多くの建設関連企業の計画指導を引き受け、新しい構造の開発や、安全性の確保に寄与されました。

先生をしたう人たちによる松井記念会の活動は、年々活発化し、1990年より松井賞を設けられ、現代建築の発展に欠くことのできない構造的建築家の顕彰と人材育成に、国の内外を問わず、多大の寄与をされました。

松井先生の著作は、作品集にとどまらず、「見える力学—力と縞」「フラットスラブの構造とデザイン」他多数の出版物があり、その一部は、ひろく大学のテキストとして用いられるなど、構造の発展と理解に尽くされました。

温和で、自らに厳しい求道者のような趣きと、人間性にあふれた生活信条によって、ひたすら建築の新しい創造に理論的裏付けを与え、構造という体系的思考から、環境の進化に全生涯を捧げられました。

永年にわたり指導を受けて参りました私どもにとって、先生の訃報は衝撃的で、俄かに信じがたい事件でありました。

現在進行している産学協同研究の、

1　テンション・ワイヤーによる1000メートルをこえる極超高層ビルや

2　フローティングの海上リニヤー都市構想

3　さらに多層の人工土地の研究などそれらの主導的リーダーを失って、暗澹たる思いがいたします。

何とか、これらの研究を継続することが、残された者の、先生に対する務めと思いますが、余りに大きな存在だっただけに、先生の遺志を受け継ぐことができるかどうか。

どうか天上より、後進を叱咤激励し、見守って頂くようお願いをして、弔辞といたします。

1996年1月19日

（葬儀　於上野寛永寺輪王殿）

弔　辞

早稲田大学教授　田中彌壽雄

謹んで早稲田大学名誉教授松井源吾先生の御霊前に捧げます。

松井源吾先生、先生とこのように早く御別れすることになろうとは本当に思いがけない驚きと悲しみでございます。

先生は昭和23年に早稲田大学理工学部の専任教員となられて以来平成3年に御退職されるまで43年間にわたり教育と研究に情熱を傾注されました。

研究面におかれましては、明快な解析理論と光弾性実験とを多彩に駆使されて難解な構造物内の力の流れを適確に解明されて輝かしい数々の業績を残されました。日本建築学会賞をはじめ数々の栄誉を受けておられます。

またこれらの研究成果を実際の建物の設計にも応用され、独創的な構造システムを数多く開発されて、構造設計家として安東勝男先生と設計された早稲田大学理工学部校舎をはじめ、多くの名建築を生み出されました。

また後進を育成するという御趣旨から早稲田大学を御退職の際には、優れた構造設計者へ与えられる松井源吾賞を設定しておられます。

一方教育者として先生は数多くの優秀な人材を育てられて世に送り出し建築界の発展に多大の貢献をしておられます。

先生は水泳を愛され、お若い時には選手として活躍されたと伺っておりますが、スポーツマンらしい伸びやかなそして明るい御性格の先生でありました。

もう一つ先生がこよなく愛されたものはお酒でした。先生は本当に御気持のおやさしい気配りの方でありましたので先生のお酒の席はいつも和やかに楽しいものでありました。

先生は常に物事の本質をとらえた非常に簡潔な御言葉で表現される方でした。

これからは先生から直接御教えを受けることはできなくなりましたが、御生前の先生の御言葉をよくかみしめ、また先生が残されました数多くの珠玉のよ

うな御著書から今後とも多くの事を学ばせていただき、微力ながら先生の御教えを継承させていただきたく存じております。

先生本当に長い間の御指導ありがとうございました。

どうか安らかにお眠り下さい。

平成8年1月19日

（葬儀　於上野寛永寺輪王殿）

弔　辞

熊本学園大学名誉教授　甲斐　弦（ユヅル）

松井君、今度ほど己の愚かさを思い知らされたことはない。今日（1月14日）の毎日新聞を見て、あっと声をあげた。

「松井が死んだぞ。松井源吾が――」

台所の妻を呼ぶ声が震えた。

昨年の11月11日にちゃんとお葉書をいただいている。“まだ通院を続けています。伊沢政枝さんが親切に看護して下さるので、近く結婚するつもりです”と書いてあった。肺ガンではないかな？と一抹の不安はあったけれど、なあに、あの元気者だ、すぐ又元気になるよ、と己に言い聞かせ――正直に言えば希望的観測で己を欺き、年末の仕事に立ち向かったのである。

それが悔しい。なぜあの時すぐにお見舞いの手紙を書かなかったのか。あの時手紙を出してさえおけば、ああ、甲斐先生から手紙が来た、ときっと君も喜んでくれただろうに――何という愚かな私だったことか。

戦争に行き、何度か弾の下もくぐり、人間の生命のいかにはかなく、はかないが故にいかに尊いものであるかを身にしみて悟っていたはずなのに――いつも子供や孫たちには「一期一会（いちごいちえ）」の心がけを説き聞かせているこの僕だというのに。思えばあれもただの口頭禅だったのか。松井君、済まない。許して下さい。

今日、君が以前送ってくれた小冊子「縞」を押入れから取り出して拾い読みしました。建築のことは僕には分からないけれど、所々にはさまれた随想が遠い昔をよみがえらしてくれる。

君は昭和13年3月に佐渡中学校を出たね。4年間君たちに英語を教えた僕は、同じ13年の4月に佐渡を去り、内蒙古の西の果ての包頭（パオトウ）に新設された蒙古中学校の副校長となって赴任している。

佐渡の思い出は今も心に刻まれて消えない。校舎脇の素掘りのプールで君も

僕もよく泳いだね。「縞」の21号に「蛇と泳いだ泥んこの池」と題して君は書いている。水の澄んでいるのは春先だけのことで、泳げばたちまち泥水と変る。ある時君が一人で泳いでいて、ふと見ると、すぐ鼻先を蛇が泳いでいる。わあっと叫んで君は逃げた。蛇もびっくり、これまた逃げ出す。岸にいた友人たちは大笑い——と君は書いている。

僕の思い出は少し違う。僕の記憶では、君と並んで泳いでいたら、突然君が、先生、蛇です、と叫んだ。縞蛇か小豆蛇か、1メートル近い奴が我々の間を悠々と鎌首もたげて泳いでいたのだ。わあっと二人共岸に逃げた——どちらの記憶が正しいのか、今となっては確かめ様もないが、しみじみ思うのはあの頃の教師と生徒を結びつけていた絆の固さだ。

授業が終わっても我々はすぐ家には帰らなかった。生徒と一緒に柔道をやったり剣道をやったり水泳をやったりして、暮れぐれまで学校に残った。生徒は我々には血のつながった存在だった。生徒の親御さんが亡くなりでもしようものなら、何キロという山道を歩いてお悔みに行ったものである。村祭りの時には、「何の風情もこれなく候えども」という風流な招待状に誘われて生徒諸君の家を廻り、勧められるままに酒を飲み過ぎて醜態を演じたものである。

松井君、戦時中君は内地で爆撃を受け、僕は内蒙古で、又中国の山西省で、当時は八路軍、今の中共軍と戦い、お互い運よく命だけは助かって今日まで生きてきたね。

君は建築学、僕は文学。進路は違うけれど、共に一筋の道を歩んだね。僕が文学賞をもらったりすると、君はいつも風の便りに聞きつけて、すぐに大きな花束を送り届けてくれた。あまりに大きいので狭い僕の家には置く場所がない。よく手紙や電話で君に訴えたね。

「松井君よ。花はまことに有難いけれど、少々豪華過ぎて、これでは先ず家から改築してかからねばならぬ」と。

君の親切、今も忘れない。それなのに、一番大事な最後の時に、一通の葉書もあげなかったなんて、己の愚かさがただただ悔まれてならない。松井君、ど

うか許して下さい。

実に立派な生涯だったよ。どこに出しても恥ずかしくない足跡を君は残してくれた。君の育てたお弟子さんたちが君の業績を受け継いで、更に立派なものに仕上げて下さるものと僕は固く信じている。

吉田松陰の言葉を思い出します。

「生死離合、人事は倏忽(しゅっこつ)たり。但し奪われざるは志、滅せざるは業。天地の間恃(たの)むべきものは独りこれのみ」

君はこの言葉の真実を身を以てあかし立ててくれました。有難う。安らかにお眠り下さい。僕も君の無言の教えを胸に秘めて、あと数年、「旅路の終り」まで歩き続けよう。さようなら。

合掌

平成8年1月14日

(葬儀　於上野寛永寺輪王殿)

お別れの言葉

門下生代表　松谷菊男

恩師松井源吾先生のご霊前に、謹んでお別れの言葉を申し上げます。

先生は昨年4月、検査のため入院されたおり、肺に陰のあることを指摘され、その後、楽しみにしておられたハンガリーへの旅行をキャンセルし、また6月の先生の誕生会を兼ねた松井源吾賞授与式には病院からご出席される等検査を続け、その結果手術を受けられました。しかし9、10月頃にはすっかり元気を取り戻されたと伺い、日頃水泳で鍛えておられました先生のこと、すぐにも元気なお姿を我々の前に現わしてくれるものと信じておりました。11月には延び延びになっていたが近く結婚します、更に結婚しましたとのお便りを矢継ぎ早に頂戴し、我々一同相寄って、新春1月3日に都ホテル東京で「松井源吾先生のご結婚を祝う会」を開催させて頂くことを計画し、先生にご相談申し上げご快諾を得て、その日を鶴首しておりました。

しかしながら神のいたずらでしょうか、元旦、二日と体調が思わしくないので三日の祝う会を延期して欲しいとのお申し出があり、致し方ない、存分にご静養頂いていずれ近々に盛大にやろうと先送りにした次第です。

また、先生は1月9日執刀医の回診の際、態々ベッドに起き上がられ「いろいろと有り難うございました。先生のして下さった治療に感謝しています」と感謝の言葉を述べられたと聞き、先生のお人柄に今更ながら敬服致しました。

それが翌々日、突然帰らぬ旅への旅立ちになろうとは誰にも考えられませんでした。

先生、本当に永い間いろいろとご教導頂き有り難うございました。先生に身近で薫陶を受けた弟子、松井組も五百人を超え、その上先生のご指導で博士号を頂いた者も二十人を越しました。

その弟子一同、今先生の御霊の前に集まり、お別れを惜しんでおります。

先生とのお別れに多少お手伝いをさせて頂いている中で、各方面から寄せら

れました心からの供花の数々、そして大勢の方々のお見送りに接し、ふと私は釈迦の涅槃を画いた涅槃図を想起し、釈迦との別離を惜しみ、菩薩もそうでないありとあらゆる有縁無縁のものが集い、泣き悲しんだ光景を今、目の当たりにした感を深くしております。

先生のご人徳・ご功績あってのこと、先生を師とし、弟子の一人に加えて頂けたことのご縁に深く感謝すると共に至上の誇りに存じております。

我々は先生の教えを絶やす事なく、今後互いに相携えて学究にまた仕事に励み夫々の人生と世の中に生かして行くことをご霊前にお誓い申し上げます。

先生のご冥福を心からお祈り致します。

どうぞ安らかにおやすみください。

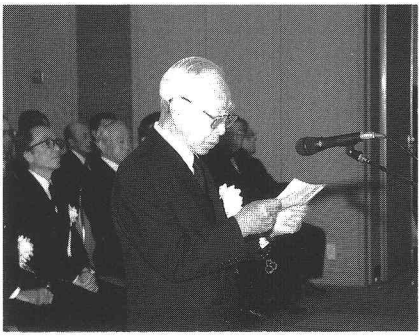
平成8年1月19日

（葬儀　於上野寛永寺輪王殿）

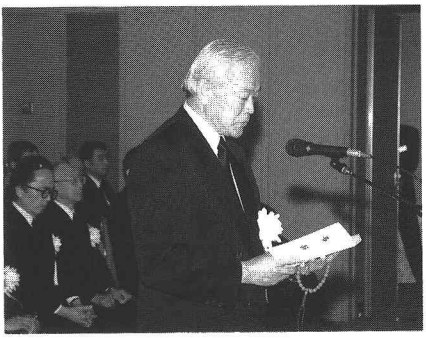
弔　辞

葬儀委員長　建築家　菊竹清訓殿

早稲田大学教授　田中彌壽雄殿

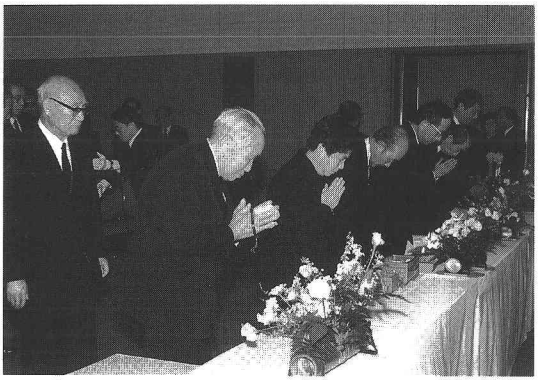


熊本学園大学名誉教授　甲斐　弦殿
（代読）



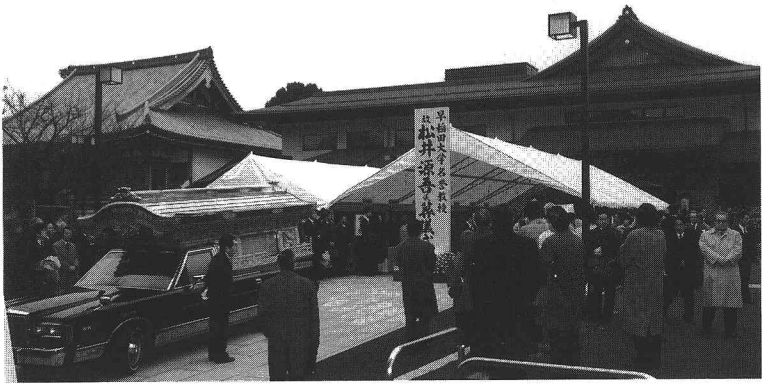
株式会社東京鐵骨橋梁製作所
副社長　松谷菊男殿

葬儀委員長挨拶



お別れ

出　棺



松井源吾先生告別式

早稲田大学名誉教授松井源吾儀、かねてより病気療養中のところ、一月十一日午後四時五十二分逝去されました。

ここに生前のご厚誼を深謝し謹んでご通知申し上げます。

追って通夜および告別式は左記の通り執り行います。

記

一、通　夜　一月十八日（木）　午後六時～七時

一、告別式　一月十九日（金）　午後一時～三時

一、場　所　上野寛永寺　輪王殿

東京都台東区上野公園十四―五

（山手線上野駅公園口下車　徒歩五分）

TEL　〇三（三八二一）四四三三

平成八年一月十二日

喪主　松井政枝

東京都品川区上大崎二―二四―十一

目黒マンション二―四〇二号

TEL　〇三（三四九三）二三〇四

FAX　〇三（三四九三）二三〇五

O・R・S事務所

輪王殿周辺地図

●第一勧銀
富士銀行●
至
日暮里駅
言問通り
至　浅草
●そば屋
ＪＲ鶯谷駅
（南口）
●忍岡中学
入谷ランプ
寛永寺
●上野中学
北上野交差点
上野桜木交差点
東京芸大
東京国立博物館●
（第二会場）
輪王殿
（第一会場）
両大師●
P 都営駐車場
●寿司屋
●東京芸大
日本学士院●
P 都営駐車場
首都高速①号線
国道４号線
《上野恩賜公園》
●国立科学博物館
上野高校●
上野動物園●
●国立西洋美術館
至
根津
●消防署
東京文化会館●
ＪＲ上野駅
（公園口）
京成上野駅●
至
御徒町駅
●丸井百貨店
上野ランプ
至　日本橋
◎　JR上野駅公園口・鶯谷駅南口より徒歩５分
◎　京成上野駅より徒歩１０分
◎　【　⟶　】印は一方通行を示しています
◎　首都高速上野・入谷ランプより約５分
◎　輪王殿内には約７０台分の駐車場が有ります

早稲田大学　名誉教授　故　松井源吾　儀　葬儀の際は
御多用中　遠路わざわざ　御弔問　御会葬を賜わり　御鄭重
なる御厚志御芳情有難く深謝致します
右略儀乍ら書中を以って謹んで御礼申し上げます

平成八年一月十八日（通夜）
一月十九日（告別式）

東京都豊島区南池袋二丁目三十六番一号
葬儀委員長　菊竹清訓
喪主　松井政枝
外　親戚一同

松井源吾先生告別式

早稲田大学名誉教授　松井源吾儀、かねてより病気療養中のところ、
一月十一日午後四時五十二分逝去されました。
ここに生前のご厚誼を深謝し謹んでご通知申し上げます。
追って通夜および告別式は左記の通り執り行います。

記

一、通　夜　一月十八日(木)　午後六時～七時
一、告別式　一月十九日(金)　午後一時～三時
一、場　所　上野寛永寺　輪王殿
東京都台東区上野公園十四―五
TEL　〇三（三八二一）四四三三

平成八年一月十二日

葬儀委員長　菊竹清訓
喪主　松井政枝
松井源吾記念会
外　親戚一同

惜別の詞・訃報

お疲れのことと、存じます。
先日、申上げました、松井君への「便り」を
同封いたしますので、お供へ願います。
私は、この「便り」は、彼の前に、そのつど
供へる「花」だと、思って居ます。
萎れたところ、どうぞ、お捨て下さい。
御自愛のほど、切にお祈りします。

一月二十八日

堤

松井様
粧次

杣井大兄　。

いま、大兄の前に思いもかけない便りを送ることになりました。「改まって何だ」と、君は言うかも知れないが、まあ勘弁して聞いて下さい。　僕が、改ったとうって、君の死で建築界がどれほどの損失を蒙ったとか、君の残した業績については語る資格はないのです。君の専攻が構造計画で、そのうえその力学的考察では孤高の域に在った由だが、僕はその面で全く門外漢ですから。

第一、君は既に君を敬慕する沢山の人々に、また、その人たちの丁重な言葉に送られたと思うから、ここでは君と僕との長い付き合いで、僕が眺めた君の「人間像」というようなものを、君と僕の間で平生交わされた率直な言葉で、想い語りさせて貰います。

君と僕との付き合いは、学部で一緒になり、下宿が近くだったことが始まりでしたね。僕が叔父に貰った、何年分かの学会誌を、君の提案でバラして、君が構造、僕が意匠部分と、二つに分けたね。その仕事の片手間に、君は学院時代、アテネ・フランセに通い、また新劇を愛したことを話しましたよ。特に、モリエールの笑いなどを題材に熱っぽい話があったことは、今もよく覚えています。僕には一寸難解だったけど。　だが、そのとき、何といっても僕が驚いたのは君の自習勉強の時間割を見た時です。その計画が実に綿密で、しかもその時間が五満つ時によく及んでいたからね。僕は、あれやこれやで君の性格の本態に触れたと思いました。君に近づいて僕が先ず捕えられたのは、君の士気と機知だったと言えます。だが、君はがり勉ではなかったですね。むしろ心に余裕があったし、同時に、生への情熱を見せて僕を羨がらせましたよ。　そんな君に、僕はかすかな矛盾を感じないではなかったが、これは間違いなく士気に満ちた君にとって、自分自身との高い次元での斗いなのだと、思い直したものでした。

その頃、僕は君を敬して、君から遠ざかりました。　お互いに下宿を変えたこともあるでしょうけど。　僕は束縛を少しでも逃れようと、学校から遠くに、君も間もなく、時間を惜んで学校の近くに引越したね。　僕は、無目的にとは言わないが、恣意的に

怠惰な日常に恥溺し、君は授業の低級に飽きて、助手たちや、上級生、それに先輩まで含めたエリート・グループに招かれたことを契機に、彼らとの共同研究に僅かにうっ憤を晴らしていたね。結果的に、君の生涯で、ワセダとの因縁は、この時期に確着されたのだ、と思っています。

その頃から暫らく、僕ら一般にとって生き易い社会ではなかったけど、君は選ばれた少数者の恵まれた環境で、自身の技能を研磨しましたね。戦争が終って僕が漸く建築の仕事に携わるようになると、忽ち君の力を借りる立場でした。君は既に栄光の道を確と踏み締めて歩いていた様。少壮学者として、研究、論文、あるときは学会の討論でも、鋭鋒を表わしていたね。颯爽としていましたよ。当時、週刊誌で親まれた「眠狂四郎」的でもあったね。

その頃、僕は人に学歴を聞かれると、答へに加へて、「松井源吾君と同期です」と言ったものだ。人は君の名を聞くと一瞬、眩しげなまなざしを見せたのちに、僕を凝視したようだが、その凝視に、どんな感情が含まれていたか、確めたことはない。

周囲の人々はみな、こうして君の存知を認めたが、更に君に近づけば、名利に恬淡な君の性格の魅力を知ることが出来たと思います。君ぐらい野暮な自己主張をせず、相手を立てることに気を配る人は珍しいね。それも相手に気付かせずにだ。こんな気づかいは相手が年下の場合でも同じようだったね。また、君の話は面白かたし、当りも軟らかだった。尤も、理論的なものには決して妥協しない鋭さが露出されてもという留保つきだし、表面の軟らかさとは別に心底には恐るべき頑固さがかくされていたことを認めてのことだけど。君の軟らかさは、つまるところ、頑固な精神が自己のためにまとた鎧のようなものだったと思っています。このように、君の、自分自身との斗いは、当然の帰結として、君を人性批評家にしたが、君の周りに多くの若い人が集ったのも、この矛盾から生れた君の魅力に惹かれてのことでせう。そう言へば、君の衒学ぶりも徹底していたね。穏かなイロニーを含んではあったがね。この点、君の好きなKK先生と好一対で、これも魅力でしたよ。一方、君は自分の運命として、分け与えられたようなものを、そのまま、受入れて

来た祝。……。この辺りで言いすぎがあるなら黙殺して下さい。と断って話をかえる。

僕が仕事のことで、君の助けを求めると、いつも心よく応じてくれた祝。時にはプライベートなことでまで君に負担をかけた。僕は自分の軽率を後悔したこともあった。君は僕にとって従弟であり、よき友でした。医師ではないが、知恵ある友、その上、物くるる友だった。僕はNTTに二十年足らずいて、大学と同じように繰上げ卒業になり、間もなく病を得て廃矢になった。君は以前より一層、僕をいたわり、九州に落ちた僕を追い掛けるように便りを寄越し、僕を慰撫し、啓発した。君が僕のみでなく、家族にまで無償の行為として施した徳のかずかずは、君自身が知る通りだから、ここでは挙げない。が、謝意だけは受けて下さい。

いま、思うと、僕はある時期から、少くとも、技術者の理想像を君に見て居ました。その意味で、君の治躍に絶えず拍手をしたし、また、君が大手ゼネコンの手生けの花になって、活動の範囲を自ら狭めることには、反対した。僕は君が名誉教授になったあとも、それまでも畏敬の念をこめて言われた、「早稲田の松井」のまま、自ら構造の解を見いだしていく終生現役であり、かつ、ずっと前の国鉄総裁の石田さんが自ら誇った「ヤングオルジャー」でも、あってほしかったのです。そうでさえあれば君が恩師のため私財を投じて改修した内藤記念館に部屋を持とうと、ORS事務所に居ようと、何時でも野心的な意匠屋の「夢」「想像力」を、計算尺の操作という手続きで、現実の地平に登場させる「お助けオジさん」であり続けられるのですからね。君はこのような僕の産出口を許していて呉れたのだと思っています。

そのうちに、君の手紙に佐渡の話が多くなりましたね。君の郷土愛を別にしてもです。挙句が「佐渡に帰る」でした。東京、佐渡の二重生活は体に無理だから止めろ、と言うと、「俺が帰らねばならん事情がある」「光弾性の実験は土蔵の中でやる」とまで聞き直した上、「荷物は明日、送り出す。がやはり淋しい。知盛、そして資盛の心境だ」と言う。僕はやっとあきらめて、君が資盛なら、建礼門院右京大夫はどうすると聞くと「どうもその問題はほかばかくないか」が返事だったね。でも、これはハッピーに片付いたね。君は生の絶頂期で終に結実させたよ。

そのあと、君は佐渡を拠点にして、今まで通りに精力的に活動したが、いつか体に影を

生じて手術しました。君に聞かせて貰った治癒率は、六十パーセントでした。……。

君はこの場合も、貴種として終始したと思う。

君は結局、エリートとして当然のことだけど、自己超克という、義務的に厳しい宿命からも、ギリシャ神話的な、神の嫉妬からも逃れることが出来なかったのだと、思う。それとも、美食家の君は、人生の料理の旨い部分だけを喰って先に席を立ってしまったのだろうか。……。僕はその程度の理では納得できないから残念だ。それに君と僕が最後に顔を合せた時の話題、「エリートの自覚」と「精神的孤独」も、早すぎた君の生の総括によって半端に終りました。後者については、僕に残された短い時間のうちで否応なしに考えさせられるでせうね。

僕は君の死によって酔中、酔後の放言相手、それも唯一人の相手だった君をなくしてしまった。僕はこの二十年ほど、カミさん以外の話し相手は君だけでした。殆ど便りによってではあったけどね。だから暫くは、分っていて空の郵便箱を開けて覗きました。僕の感傷は当分続くことでせう。とにかく、安らかに眠って下さい。おっつけ、僕の方から、訪ねます。

平成八年一月二十八日

堤　剛章

松井大兄

御机下

追、

君が彼岸に渡ったことを聞いて茫然となり、自分を失ってしまった。そのうちに貰った手紙を一つ一つ、取り出しては想い出に浸入していきました。僕にはその時、そのくらいのことしか出来なかったのです。机の脇の棚に、そのつど差込んでおいた君の便りは六、七百通あるようです。心当りで見つからない分があるので、これから探します。

この便りでも、まだまだ語りかけたいことが沢山残りました。従って、この「大兄を送る辞」のようなものは、その(二)、ぐらいのつもりです。その上、このあと、新しい話題も出てくるでせうから。その節はまた書き送って、君の前に供えて貰います。尤も、君が相手にして呉れるか、どうかは分らないが、僕自身は、心の中で言葉にするのも、口に出すのも、

書きものにするのも、同じことだと思いますから。

ところで、この便には、いつものように竜頭蛇尾に終ました。もっと抑制しなければと思いつつ、そう出来なかった。まとまりも、言葉の適切さも欠くので、書き直そうかと思ったが、却ってこのままの方が、僕の率直な気持を損わないようにも思った。身勝手な納得だけど。

今夜の酒は当然、苦口だったが、この酔後の放言の後仕末に、例によって僕の「支言多謝」と、それに加えて、君の「では又」を、僕が代って、言っておきます。

松井源吾兄を悼む

佐渡　山本　修巳

松過ぎの夜の訃報や風荒し
寒海鼠桶にひしめく誰にも死
睦月はや黄泉に旅立つ人ありし
雲間より冬の暮光のとき逝きぬ
冬の蘭冴え冴え棺の顔埋め
冬蘭の上に著書入れ棺の中
東京に粉雪舞ふ日の葬儀かな
東京の大雪となり喪にこもる

Dear Mrs. Masae Matsui

Remember that you're not alone—
Our thoughts go out to you
With deep and heartfelt sympathy
For what you're going through.
We care about you very much
And hope that time will heal
Your sense of loss and loneliness
And ease the pain you feel.

Kiyoshi & Yasuko
Aawano

Jan 17, 96

蓋棺（がいかん）の辞

死は突然やって来て、すべての幸福を我々の手から奪って行ってろう。是には誰も抵抗出来ない。夫は誰かれの区別もないのだ。私より年の若い松井君の訃報をアメリカで聞くとは思はなかった。又戦中派の戦士が一人居なくなった。然し最期に彼は愛する人の腕の中で死んで行ったのは、せめてもの幸せと云ってよい。他の誰よりも良い環境の中で、彼は精一杯の仕事をし終えてろったのだ。若くて死んだギリシヤの戦士のように、冥福を祈る

一九九六年一月

沢野生

15 January 1996

Leslie E. Robertson
Saw-Teen See
Karla Mei Robertson
45 East 89th Street, Apt. 25C
New York, New York 10128
Tel: (212) 860-4327
Karla Mei: (212) 289-7556

Dr. Kiyonori Kikutake
Sunshine 60, 19th floor
Higashi-Ikebukuro 3 chome
Toshima-ku 170, Tokyo
JAPAN

Dear Dr. Kikutake:

In a letter dated 27 December, which arrived just three days ago, Prof. Matsui wrote to me suggesting that he might be able to see me during the course of our forthcoming travels to Tokyo. While the letter did say that he was in Keio Hospital, it was a strong letter suggesting that he would soon be able to leave the hospital. And now comes your communication to me and the tragic news that your long and dear friend, Prof. Gengo Matsui, has passed away.

Because of my inability to learn the Japanese, it was not always easy for Prof. Matsui and me to communicate effectively. Still, despite this obstacle, I believe that strong bonds were developed between the two of us...a relationship that brought to me a sense of warmth and of pride; it is not often that we are graced with a person with the vision and the integrity of Prof. Matsui. My how I envied his ability to stand back from the press of his on-going responsibilities and to look at the larger perspective!

As well, Prof. Matsui remained deeply interested in the process of the development of young designers in the United States. His interest sprang from an intense pride of the young people of Japan...but he was interested always in how the thoughts and the methodologies of the United States could be transferred and nurtured in Japan. Indeed, when he and Torashichi Sumiyoshi traveled to New York regarding the exhibit of the wondrous wooden joints of Japanese architecture, it was with considerable pride that I was able to introduce Prof. Matsui to some of the architects and engineers of New York and, particularly, to the young and talented engineers of our staff.

It is a great loss for us all...for you, his dear friend, and for me, who received much from his letters and his books and from the opportunity to learn from him.

Best regards...but in sadness

Leslie E. Robertson

By courier mail and by facsimile

［レスリー・E・ロバートソン氏よりの書簡、1996年1月15日付］

Dear Dr. Kikutake:

3日前に届いたばかりの12月27日付け書状で松井教授は，私の次回東京訪問中に私に会えるかも知れない、(慶応病院に入院中とはおっしゃらずも)間もなく退院できるかもと元気にお書きでした。その直後の貴殿よりの訃報でした。

私が日本語が不得手なこともあり、松井教授とのコミュニケーションは容易ではありませんでしたが、両者は強い絆で結ばれ、私には暖かく、また誇らしいおつきあいでした。松井教授のようなビジョンと人格を兼備した人に会えることは滅多にありません。ご多忙な日々にも時に身を引き、より大きな世界に考えを巡らせることのできた同氏の能力を、私は羨んだものです。

氏はまた米国で若い建築家を育てる方法にも関心を寄せられ、それは日本の若人の熱心さとプライドに裏打ちされたものながら、いつも米国の思想や方法論を日本に移植し開花させることを考えておられました。日本の素晴らしい木造建造物の木製継手(joints)の展示会のために住吉トラシチ氏とニューヨークに来られた折り、私はニューヨークの建築家やエンジニアたちに、そして特にわがスタッフの中の若い有能なエンジニアリらに対し、松井教授を大いなる誇りをもってご紹介致しました。

貴殿にも、また氏のお手紙/著書、氏との会合を通じ多くを学んだ私にとっても、大きな喪失であります。敬具。

弔意を込め、
レスリー・E・ロバートソン

TRANSMISSION PAR TELECOPIE

Date : vendredi 2 février 1996

Expéditeur : André Wogenscky
80 avenue du Général Leclerc
78470 St Rémy les Chevreuse - Tél : (1).30.52.00.47. - Fax : (1).30.52.73.20.

Destinataire : M. Tempéi SUMINO

Numéro de télécopie destinataire : 19_81_473_26_1319

Nombre de pages (y compris celle-ci) : 1

Objet : Réponse à votre fax du 31_01_96

N/Réf :

Cher Tempéi,

Merci pour votre fax. Vous avez bien fait de me prévenir de la mort de Monsieur Matsui. Cela me peine car je me souviens très bien de notre visite et de ses intéressantes explications des poutres courbes du bâtiment fuseau. Il m'avait offert l'un de ses livres et plus tard m'a expédié en France un exemplaire d'un nouveau livre. Je crois que c'était un grand ingénieur. Et je suis heureux de penser que nos poutres courbes du fuseau gardent sa trace, et sa présence dans l'Université que nous avons réalisée ensemble.
Je continue de travailler pour l'extension de l'Université.
Si vous en avez la possibilité, dites à Monsieur YODA que j'ai de la peine d'apprendre la mort de M. Matsui et transmettez lui mon bon souvenir.

J'espère que votre lettre sous-entend que Madeleine, votre fille et vous-même allez bien. Votre fille n'a-t-elle pas un petit frère?

Grande amitié.

André

44

Andre WOGENSCKY（アンドレ・ヴォジャンスキー）から住野天平へのファックス

１９９６年２月２日（金曜日）

親愛なる天平へ

ファックス受取りました。松井氏のご逝去のことを知らせてくれてありがとう。私達がいっしょに彼の研究室に伺った時に（宝塚造形芸術大学の）紡錘形棟のカーブのついた梁についてとても面白く説明をしてくださったことをとてもよく覚えていますから非常に悲しい気持ちになります。その時松井氏から著書を一冊頂きました。またその後も，新著を送って頂きました。彼は偉大な構造家であったと思います。そして，「私達がいっしょに実現した宝塚造形芸術大学の紡錘形棟のカーブのついた梁が，まさに彼の足跡，彼の存在を保持しているのだ」と考えられるということは幸せなことだと思います。私は現在も宝塚造形芸術大学の拡張の仕事を続けています。機会があれば，松井氏が亡くなったことを知って私は深い悲しみを感じていると依田氏に伝えてください。また，松井氏は私にとって忘れがたい人であると言ってください。

あなたの手紙には書かれていませんでしたが，マドレーヌもリラも元気のことと思います。リラにはまだ小さな弟はいないのかな。

友情をこめて，

アンドレ

BUDAPESTI MŰSZAKI EGYETEM
Építőmérnöki Kar
Mechanika Tanszék

TECHNICAL UNIVERSITY OF BUDAPEST
Faculty of Civil Engineering
Department of Mechanics

H -1521 Budapest, Műegyetem rkp. 3. Hungary
Tel: (36-1)-463-1161 Fax: (36-1)-463-1099

Professor Teruaki Tanaka
Kokushikan University
Department of Architecture
Faculty of Engineering
4-28-1 Setagaya, Setagayaku
Tokyo, Japan

February 19, 1996

Dear Professor Tanaka,

We were deeply shocked by the sorrow fact that professor Gengo Matsui died and we sent a letter to the address given in your letter. Unfortunately our letter was returned by the Japanese post office indicating that the address was not correct. Now I am sending you again enclosed our letter.

We know very well that you had a very close relationship with your master. His death is a great loss for you therefore we express our deepest sympathy to you.

When do you intend to come to Hungary? Please let us know about your plans in due course.

As I already mentioned, during the XIXth Congress of IUTAM between August 24 and August 31 I will be in Kyoto. I hope I have the chance to see you that time.

With best personal regards, sincerely yours

Sándor Kaliszky

BUDAPESTI MŰSZAKI EGYETEM
Építőmérnöki Kar
Mechanika Tanszék

TECHNICAL UNIVERSITY OF BUDAPEST
Faculty of Civil Engineering
Department of Mechanics

H -1521 Budapest, Műegyetem rkp. 3. Hungary
Tel: (36-1)-463-1161 Fax: (36-1)-463-1099

We have been shocked by the sorrow fact that professor Gengo Matsui passed away and we express our deepest sympathy to his relatives, friends, colleagues and students.

It was a great honour for us to meet with him several times and to enjoy his hospitality and support.

We will keep his wonderful personality in our memory forever.

Budapest, January 17, 1996

Kálinszky Sándor Nédli Péter

Kaspár Zsolt Hegedűs Ilt

Kollár Lajos

WEIDLINGER ASSOCIATES, INC.
Consulting Engineers
333 Seventh Avenue, New York, NY 10001

TEL:: (212) 563-5200
FAX: (212) 564-2279

FAX MEMO

DATE 18 January, 1996

ATTENTION Shigeru Mochizuki

FIRM NAME Musashi Institute of Technology

TELECOPIER NO. ( ) 011 813 5707 2198

FROM Matthys Levy

PROJECT

TOTAL NUMBER OF PAGES, INCLUDING COVER SHEET

MESSAGE

Both Mario and I were greatly saddened by the death of Prof. Matsui. He was a great engineer and Mario particularly remembers him. I never had a chance to meet him but I was familiar with some of his writings and certainly his reputation. Please extend our regrets to his family.

I am glad to hear that the translation of the earthquake book is going well. For your information, I am attaching a list of errata that we have accumulated.

I hope you are well and look forward to seeing you again.

Regards,

●新聞・雑誌・その他

松井　源吾氏（まつい・げんご＝早稲田大名誉教授、建築構造学専攻）11日午後4時52分、肺がんのため東京都新宿区の病院で死去、75歳。葬儀・告別式は19日午後1時、台東区上野公園14の5の寛永寺輪王殿で。自宅は豊島区南池袋2の36の1。喪主は妻政枝（まさえ）さん。

（毎日新聞）

松井　源吾氏（まつい・げんご＝早稲田大名誉教授・建築構造学）11日午後4時52分、肺がんのため、東京都新宿区の病院で死去、75歳。葬儀・告別式は19日午後1時から台東区上野公園14の5の寛永寺輪王殿で。喪主は妻で文化女子大教授の政枝（まさえ）さん。自宅は豊島区南池袋2の36の1。

（朝日新聞）

松井　源吾氏（まつい・げんご＝早稲田大名誉教授、建築構造学）11日午後4時52分、肺がんのため東京都新宿区の慶応大病院で死去、75歳。新潟県出身。自宅は東京都豊島区南池袋2の36の1。通夜は18日午後6時から、葬儀・告別式は19日午後1時から東京都台東区上野公園14の5、寛永寺輪王殿で。喪主は文化女子大教授の妻、政枝（まさえ）さん。

（産経新聞）

松井　源吾氏（まつい・げんご＝早大名誉教授・建築構造学）11日午後4時52分、肺がんのため死去。75歳。告別式は19日午後1時から東京都台東区上野公園14の5の寛永寺輪王殿で。自宅は豊島区南池袋2の36の1。喪主は妻で文化女子大教授、政枝（まさえ）さん。

（読売新聞）

松井　源吾氏（まつい・げんご＝早稲田大名誉教授）11日午後4時52分、肺がんのため東京都新宿区の病院で死去、75歳。通夜は18日午後6時から、葬儀は19日午後1時から、いずれも台東区上野公園14の5、寛永寺輪王殿で。喪主は妻政枝（まさえ）さん。自宅は豊島区南池袋2の36の1。

建築構造学の権威で、熊本でも県立東稜高体育館や阿蘇郡小国町林業センター、熊本市立熊本博物館などの構造設計を手がけた。

（熊本日日新聞）

建築構造学に貢献

松井早大名誉教授が死去

わが国の建築構造設計の発展に貢献した松井源吾早大名誉教授が十一日午後四時五十二分、肺がんのため東京都新宿区の病院で死去した。七十五歳だった。葬儀は十九日午後一時から台東区上野公園十四―五の寛永寺輪王殿で営まれる。喪主は妻政枝（まさえ）さん。自宅は豊島区南池袋二―三六―一。

◇　◇

一九四三年、早稲田大学建築学科卒、講師・助教授を経て六一年から同大学教授を務めた。研究、教育、実践の三つを一体としてとらえた幅広い活動は、わが国の建築構造学の発展に大きな足跡を残した。とくに構造をわかりやすく理解させるため、視覚的に力の流れを見せる光弾性の実験を早くから実施、その成果は広く建築架構に応用されている。

一方で、構造設計者としても独自で創造的な世界を築いた。構造家というよりは構造的アプローチによる建築家という表現がふさわしい。こうした功績は早大退任を記念して創設された松井源吾賞に継承され、構造設計者の目標となっている。

主な受賞は日本建築学会賞（作品・業績）、日本光弾性学会賞。著書に『見える力学』『フラットスラブ構造のデザイン』『木造の構造設計』など。構造設計した作品には「江戸東京博物館」「多摩霊園納骨堂」「日立シビックセンター」などがある。

日本が誇る天才的構造家

菊竹清訓氏（菊竹清訓建築設計事務所代表）の話　日本の誇る天才的構造家であり、早稲田大学では偉大な教育者であり、優れた学者であった先生が、病を得て、あっという間に他界されたことは、まことに残念で、大きな空洞ができたような気がして、後輩として今は言葉もありません。

生前の温かいご指導に対し、深甚のお礼と感謝を捧げ、先生の魂の平安とご冥福を心からお祈り致します。

（日刊建設通信新聞）

追悼 松井源吾氏死去（昭和十三年卒）

―百周年記念会館設計者―

福嶋 太郎右衛門
（昭和13年卒）

松井源吾君が亡くなった。

降り頻る雪の中で、いくつもの思い出がめぐる。

外語大を出た故市橋保雄君が、戦後、両津市長となり、両津病院を建設することとなって、競技設計が行われた時に、彼に審査委員長を依頼したのだった。早大に進んだ彼は建築学会では、幾多の業績を残した。市橋君は、「世界の松井だナア」と言っていた。私もロシアやヨーロッパからの便りを度々もらったものであった。

山本修之助先生の追悼会では彼と共に挨拶を述べた事もあった。

中学の同窓会を五十年振りに佐渡で開いた時は、湖の見えるホテルの夜、酒を飲めない私をつかまえて、感慨をこめて夜おそくまで語りかけたりした。

紅顔の彼にはじめて出会ったのは、中学に入学した頃である。私達は彼を〝カウ〟と言う愛称で呼んだ。彼は成績もよく運動も熱心だった。県下中等学校の水泳大会で佐渡中学が優勝したのは背泳で彼が活躍したのが原動力となったのだった。私達が夢中に声援したのもなつかしい。

東大を出られて直ぐに赴任して来られた英語の甲斐弦先生は生徒の人気を集められ、その人柄に魅せられ、愛慕心酔した一人だったが、彼と先生とは生涯変わることのない師弟の絆で結ばれたものだった。先生はその後蒙古へ出かけられることとなったが、青い空と涯しない草原、匈奴の国。日本刀を背に草原を行く先生―私達のロマンは限りなくかきたてられたものだった。

今度その熊本在住の先生から弔詞がよせられた。哀切きわまりないものなので、その全文をここに紹介したい。

私も弔電と共に一句を霊前に送った。

喪の空へ色まさりゆく実南天

窓外の雪はまだ降り止まない。

■弔辞

熊本学園大学名誉教授
甲斐弦
は「弔辞」の項に。
（佐渡高校同窓会報より）

故松井源吾博士を偲ぶ

研究生には慈父のような存在

早稲田大学名誉教授、松井源吾博士が今年一九九六年一月十一日急逝されました。心から深く追悼の意をささげ、先生のご冥福をお祈り致します。

先生は一九六一年より母校早稲田大学の教授として、約四十年にわたり多くの後輩の指導、育成にあたられて、一九九一年より名誉教授として学問の研鑽につくされました。

この間、早大理工研究室棟で一九六七年、日本建築学会賞を受けられています。

先生は無口で、慎み深く人柄は謙虚で自ら律することの厳しい方でしたが、研究生には温かい慈父のような存在でした。これは佐渡の実家が真野町の名門で、父は長年県会議員、叔父に郷土史家など、学者・素封家としての血筋が基盤としてあったものと思います。

研究室から博士を二十五名も輩出するなど、教育者として並外れた存在でした。私の博士号学位論文のまとめに（一九九五年）先生のお力添えのあったことを追慕の情の中に思い浮かべます。モアレ法の実験と併せて、まとめて「軸力ドームの研究」という論文となりました。

これがきっかけで、新潟市民会館コンペ（一九九三年）落選、熊本体育館コンペ（一九九四年）落選の末、北九州マルチメディアドームコンペ（一九九五年）で入賞し、軸力ドームがやっと実現することになりましたが、一九九八年の完成を待たず松井先生がお亡くなりになったことは、かえすがえすも残念でなりません。

同門には藤本一郎（元関東学院長）、徳広育夫（鹿児島大教授）、田中輝明（国士館大教授）、田中彌壽雄（早大教授）、西谷章（早大教授）など幾多の構造家で、松井源吾記念会をつくられ、毎年先生の誕生日に集まってお祝いしていました。「構造家を讃える松井源吾賞」もこの記念会が主催しているもので、これまでにロバートソン、川口衛先生ほか九名の方々が受賞されております。これは今後とも松井先生の遺志を受けつがれるものと思います。

先生と私との関係は昭和二十八年ころから、もう四十年にも及び構造計画分野を全てご指導いただき、百以上の作品を一緒に考えて下さいました。なかでも特筆したいことは、先生との連名の特許のことです。主なものだけでも十三を超えます。そのなかには海上都市あり、高層建築あり、人工土地ありで多様な内容です。例えばその中で、「ボイドスラブ工法」があります。先生は一時ピンポン玉

研究者、教育者、構造家として、わが国の建築構造界のみならず、建築設計界、建設産業界に大きな貢献をした松井源吾早大名誉教授が１月11日に死去した。75歳だった。

その功績は、早大退任を記念して創設された松井源吾賞に継承され、構造設計者の目標ともなっている。１月19日には葬儀が行われ、改めて松井氏の死を悼むとともに、最後のお別れも行われている。松井氏の愛弟子の一人として常に氏の傍らにいた西谷章早大教授と、よきパートナーとして数々の作品を実現してきた建築家、菊竹清訓氏に松井氏への追悼文をお願いした。

をコンクリートに打ち込むことを考えておられました。この発展が中空パイプとなり、これで三十作品以上を実現し、先生の著作は広く世界で読まれ、講演会などでこの工法の普及に貢献されました。しかし特許を独占しようとはせず、広く社会に利用されるよう公開されてきました。

しかしなんといっても松井先生のすごいところは理論と実学の調和していた点ではなかったかと思います。例えば海上都市のフローティング・プラットフォーム（浮体構造）についての実験を東京湾でされたことです。とにかく沈没しない浮体構造をどうつくるかということで、空気の独立気泡をもった物質を充填した実験となったものです。これも特許になっていますが、決して松井先生は理論だけでなくほとんど実験で確かめようとされていました。

そんなことが、力の流れを見ることの出来る光弾性の実験やモアレ法の実験になったのだと思います。わが国の木構造の木組みや、継手などを、こうした実験で力学的に解明されようとしたのは画期的なことで、これが銀座ガスホールでの展覧会となり、またアメリカでの展覧会につながり、大きく関心を呼びました。

先生との思い出はつきません。ユニークな発想で常に新しい建築架構を実現されるので、心から深く尊敬していました。東光園ホテル（一九六四年）のサスペンションスラブ、福岡市庁舎のメガストラクチャー、つづいて江戸東京博物館と、究極の構造を目指され、私どもを常にリードしていただきました。江戸東京博物館では、わが国で初めての縦揺れの制震装置（特許）を開発され、正にそれは神業でした。そういう意味で、世紀の構造的建築家こそ、松井源吾先生にふさわしく、先生がおられなかったら、フラット・スラブ工法も、ボイド工法も、海上都市のフロート（浮体構造）も生まれなかったと思います。

そして今、早大理工学総合研究所で進めている、①テンションワイヤーによる高さ一、〇〇〇㍍を超える極超高層建築の研究や②解体・組み立てのできる多層の人工土地の研究③浮体による海上リニア都市の研究④軸力ドームの大架構研究など、四つの研究はすべて松井先生のご指導で、すでに三年を越え、あと二年で終了する、これらの研究の偉大なそして天才的指導者であったのです。

今はただ先生の遺されたテーマをなんとか協力して、まとめるように努力することが、先生から受けた指導におこたえする道であると、覚悟を新たにしているところです。

合掌　（建築家）

菊竹　清訓

松井先生には、スマートという言葉がお似合いでした。ご自身もさっそうとしてスマートな方でしたが、スマートなものがお好きでした。

スマートには、頭がきれる、頭がよい、という使い方と、贅（ぜい）肉のとれた洗練さ、という使い方の二つがありますが、先生のスマートは、この両方でした。スマートさは、研究のスタイルにも、構造設計にも、またお書きになる文章にも、貫かれていました。

構造家として理想的な姿を示す

ご承知のように、先生のモットーは、「設計から研究テーマを、研究成果を設計に」です。研究向きの人と設計向きの人がいて、どちらが優れているとは言えない、という趣旨のことを、先生はよく言われましたが、どちらにも非凡な才能を発揮された先生は、構造家としての理想的な姿を、スマートに示してこられたのだと思います。おそらく、先生のお気持ちの中には研究と設計に対する明確な区別はなく、斬新な構造計画の提案と、それに密接した研究論文の発表とが、きわめて自然に、また理想的なかたちで、行われていたのでしょう。

かつて先生は、研究論文は一種の芸術作品である、と言われたことがあります。数値計算にただよるのではなく、弾性論をもとに解析的な理論解を導き、その妥当性を、力の流れを視覚的に表現する光弾性・モアレ法により検証するという論文は、先生の、スマートな論文に対するこだわりだったと思います。

松井先生は名誉教授におなりになってから、ふたつめの日本建築学会賞を受賞しています。「建築構造の指導・研究・設計の総合」の業績によるものです。研究と設計を両立し、両者の総合化を実践された先生は、また教育者としても計り知れない貢献を残されています。二十数名の博士学位取得者をはじめとする、大学、大学院での直接的な教え子は無論ですが、非常に多数の著作を通して、間接的にも広く建築関係者に対して、有形、無形の指導をされていたと思います。間接的な指導の、典型的な一例として、中空スラブを挙げることが出来ます。中空スラブは、鉄の薄板でつくる中空管を埋め込むRCスラブで、先生が三十年ほど前に開発し初めて実施したものです。現在このスラブの採用例は数万件にも及びます。もちろん、ほとんどの採用例は、先生の直接指導によるものではありません。中空スラブ関連の著作を通じての間接指導が、これほどまでの実施例に結びついたのだと思います。

先生は、横並びがお好みではありませんでした。独創的で実践的な研究と設計をスマートに結び付け、数々の名建築を生み出すという先生の活動は、まさに松井源吾のそれであり、独自のものでした。松井先生のような学者はもう出てこない、という気がします。

（早稲田大学教授）
西谷　章

（建設通信新聞）

松井源吾先生のご逝去を悼む

「設計から研究テーマを、研究成果を設計に」

西谷章（早稲田大学教授）
依田定和（O・R・S事務所代表取締役）

建築構造設計の研究・開発・教育と実作の双方に力を注ぎ、両分野で多大な業績を残された松井源吾氏（早稲田大学名誉教授）が一月一日逝去された。早稲田大学で松井氏に師事された西谷章氏と、34年間にわたって実作の構造設計のお仕事を共にされた依田定和氏に松井氏の教えやお人柄などについてご執筆いただいた。

研究者、教育者としての姿

研究と設計の両立、これは、構造を志す者が1度は考える夢であり、理想の姿かもしれない。この夢を、あたかも当然のように、ごく自然に実現してこられたのが松井源吾先生であった。それも単なる両立ではなく、斬新な構造計画の提案と密接する研究論文の発表とを結び付けるというやり方は、先生の独壇場であった。

設計と力学とは表裏一体であり、力学が分かるようになれば設計はうまくなる、また、設計がうまくなれば力学が分かるようになる、そんなことを先生はおっしゃっていた。おそらく、先生のなかでは、研究と設計に対する区別といったようなものはなく、力の流れを見極める、という同様な意識のなかで、ごく自然に、先生のモットーである「設計から研究テーマを、研究成果を設計に」が行われていたに違いない。

＊　＊

私が大学に入学した1969年、松井先生は建築学科の主任教授であった。当時の理工学部は大久保への全面的な移転を終えた直後で、今のように大学院への進学がさかんな時代ではなかった。しかし、構造設計と弾性力学の第一人者としての研究を両立されていた先生の研究室には、かなりの数にのぼる修士、博士の大学院生、卒論の学生が集まっていた。

私の同期でも卒論18人という大所帯で、弾性力学関連以外では、理工学部に建つ18階の51号館の風観測、浮遊式の海洋構造物、OR理論を応用した最適設計の研究など、当時の最先端の研究も行われていた。

先生は20数人に及ぶ博士学位取得者を世に送り出したのを始め、建築界、構造設計界で活躍する多くの人材を育てているが、早稲田出身、松井研究室出身といったようなことにはこだわらず、広く門戸を開いて、さまざまな相談に応じていらっしゃった。構造設計者、

建築家を始め、先生の目黒のお宅を訪ねた建築関係者は数え切れないはずである。

しかし、この先生の、広い意味での教育ともいえる指導は、直接教えを受けた人々に対するものだけではない。先生には非常に多数の実践的な著作があるが、これらを通じての、間接的な指導も少なくない。残念ながら、今では絶版となっているが、『建築構造計画入門』という、RC・S・SRC造の設計・計算の流れが、きわめて分かりやすく飲み込める名著もある。また、現在数万件にも及ぶ採用例をもつ中空スラブ、そのほとんどは、中空スラブ関連の著作を通じての間接指導によるものである。鉄の薄板でつくる中空管を埋め込むRCスラブである中空スラブは、先生が30年ほど前に開発し初めて実施したものだが、先生ご自身、後にこれほど多くの実施例が生み出されるとは、当時予想されていなかったのではと思う。

＊　＊

先生は、好き嫌いのはっきりした面をおもちで、多くのこだわりをおもちだった。横並びがお嫌いで、人の手掛けないような、独創的でしかも実践的な研究へのこだわり、コンピューターに頼る解法ではなく解析的な解へのこだわり、力の流れを見せる光弾性、モアレ法へのこだわり、電卓は使わず計算尺を駆使することへのこだわり、スマートさへのこだわり、などである。その反面、来る者は拒まず、というやさしさも備えていらっしゃった。

天才肌の、個性的な、それでいて暖かい、礼儀正しい先生であった。

（西谷章）

34年間お仕事を共にして

私が最も尊敬し、心の支えにもなっていた松井先生がとうとう亡くなられてしまわれた。今はただ、心からご冥福をお祈りするばかりである。

先生は昨年6月の誕生パーティーから約2週間後、肺の手術を受けられた。手術は成功し、順調に回復に向かわれ、9～10月には九州へ旅行されるなど、体調がよくなられたように見えた。しかし、11月の中旬、腰の痛みを訴えられて再び入院されることになり、その後1度も退院することなく帰らぬ人となってしまわれた。先生は設計に協力された工事中の建物の完成をいつも楽しみにされ、設計中のものも熱心に打合せをされていたので、先生ご自身が一番残念に思われているのではないだろうか。

＊　＊

私と先生との出会いは、大学卒業2年目の'62年2月に目黒の松井研究室（松井先生の仕事場）に入れていただいたことによる。そこは先生が下宿されていた家で、そのうちの1部屋を設計室にされていた。

当時は実験農場の設計が多く、比較的規模の大きい軽量鉄骨造の鶏舎・豚舎・牛舎などを設計していた。スパンが10m前後の平家建

で、屋根面・壁面ともに筋かいを設け、全体を籠状にして横力に抵抗させ、梁は山形の鉄筋ラチス梁で、その開き止めに太径の鉄筋を使用した単純な設計であった。明快で、当時の私にも力の流れがよく分かる構造で感心させられた。先生はこの設計を非常に自慢され、「予算の少ない建物には軽量鉄骨のブレース構造が合うんだよ。普通のトラス構造はガセットプレートが多くて損なんだ」と言われ、鉄骨量は坪当たり約10kgと驚異的に少なく、私はびっくりしたものだった。基礎についても柱軸力が小さいので、外周の立上がり壁を繋ぎ梁に利用し、柱下の基礎を一部省略して数カ所おきに設けていた。これはすべて無駄のない合理性を追求した松井先生の考えによるもので、今では私の構造設計の原点になっている。

柱部材を選ぶときには、先生はアングル、チャンネル、H形鋼、パイプおよび角パイプなどのなかでどの形が一番圧縮に有利かを手計算によって算出され、設計に取り入れられていた。鉄筋コンクリート造の建物では、耐震壁を有利な耐震要素と考えられ、多く採用されていた。このときの先生の構造計算は非常に簡単で、柱は軸力を、耐震壁はせん断力を負担する部材として扱い、そのコンクリートの断面積のみを算定されていた。「鉄筋の算定はスラブと梁と基礎だけでいいんだ」とよく言われ、計算書はいつも薄く、数ページであった。

また、あるとき、松井先生は「スラブとは何ですか、柱とは何ですか、梁とは……？」などの質問を受けられたことがあり、しばらく考え込んでおられたようだったが、その答がきっかけでまとめられた本が'69年に出版された『建築構造計画入門』だと話されていた。その内容は、松井先生が構造を担当された実例を引用しての説明で、屋根では吊り屋根、軸力アーチ、それらを組み合せた鉄板折板によるレンズ型屋根、ドーム、シェル、折板、繋ぎのある山形トラス、床ではフラットスラブ、中空スラブ、それを発展させたボイドラーメン、ワッフルスラブがある。梁では大スパンのための2層分のせいをもつ鉄骨ラチス梁、フィーレンディール梁など、柱では圧縮だけを受ける柱と、圧縮と曲げを受ける柱のそれぞれの合理的な断面形を求める方法。架構では壁柱と壁梁による架構、貫や添え柱によって柱や梁の応力を小さくする方法、吊り構造など。耐震壁と筋かいではその配置方法、基礎では建物全体として基礎を考察する方法。階段ではトラス階段、プレファブではリフトスラブ、経済設計では部材の経済断面の検討方法など、明快で夢のある多種多様な構造が示されている。この本は何回読み直してみても新鮮な気持ちにさせられ、今でも私の教科書になっている。

私はたびたび松井先生に連れられて設計事務所へ打合せに行ったことがある。その際、先方から次々

とスケッチを出されると、そのたびに松井先生は素早く計算尺を動かし部材の断面を決めていかれた。私も一緒に計算尺を動かしていると、「君は何を計算しているんだ。もう答は出たよ、遅いなあ」と言われ、なかなか松井先生の早さには着いて行けなかった。たまたま私の方が早いときは、「そんなに早いのは答が間違っている」と冗談を言われ、楽しんで打合せをされていたようである。

また、ある打合せで私が「それは『もたない』のではないでしょうか」と発言したら、先生は「そんなことは分からないだろう」と言われ、帰りのタクシーのなかで叱られたことがあった。「計算してもいないのに『もたない』なんて

▲ありし日の松井源吾先生

松井源吾氏の主な著作

書　名	出版社	発行年
建築構造体系6　材料力学	彰国社	1967年
中空スラブ構造	彰国社	1968年
建築構造計画入門	彰国社	1969年
建築構造学4（共著）	鹿島出版会	1972年
建築構造力学入門	彰国社	1973年
構造計画	明現社	1974年
建築構造の計画	彰国社	1980年
見える力学	鹿島出版会	1986年
フラットスラブ構造のデザイン	鹿島出版会	1987年
中空スラブの計画と設計（編著）	鹿島出版会	1988年
木造の構造設計	鹿島出版会	1988年
スラブのはなし	建築技術	1989年
木造の継手と仕口（共著）	鹿島出版会	1989年
中空スラブ設計要覧（共著）	鹿島出版会	1995年

松井源吾氏の略歴と主な業績

1920年　新潟県に生まれる
1943年　早稲田大学理工学部建築学科卒業
　　講師、助教授を経て
1960年　同大学教授
1968年　㈱日本建築センター高層建築物評定委員（'81年まで）
　　日本建築学会賞（作品）受賞
1979年　日本光弾性学会理事
1990年　日本光弾性学会賞受賞
1991年　早稲田大学退職、同大学名誉教授
　　（松井源吾賞創設）
1993年　日本建築学会賞（業績）受賞
1996年1月11日　逝去（享年75歳）

言うものではない。『検討してみます』と言って後で計算して答えればよい」と言われたのである。誠にそのとおりだと思い、今でも設計事務所との打合せではよくそのことを思い出す。

＊　＊

松井先生には34年間、数え切れないほど多くのことを教えていただき、深く感謝している。これからは先生への恩返しのためにも、今まで以上に無駄のない合理的な構造に、楽しみながら挑戦していきたいと思う。（依田定和）

松井源吾氏が携わった主な作品

作品名	建築設計	竣工年
アテネ・フランセ	吉阪研究室	1962年
出雲大社・庁の舎	菊竹清訓建築設計事務所	1963年
館林市庁舎	菊竹清訓建築設計事務所	1963年
早稲田大学理工学部	建築学教室・臨時建設局	1963年
浅川テラスハウス	菊竹清訓建築設計事務所	1964年
ホテル東光園	菊竹清訓建築設計事務所	1964年
桜台コートビレッジ	内井昭蔵建築設計事務所	1970年
中銀カプセルタワービル	黒川紀章建築・都市設計事務所	1972年
船の科学館	三橋建築設計事務所	1974年
ホテルニューアカオ・メインダイニング〝錦〟	稲葉長司設計事務所	1978年
福岡県庁舎	黒川紀章建築・都市設計事務所	1981年
シルバーハット	伊東豊雄建築設計事務所	1984年
世田谷美術館	内井昭蔵建築設計事務所	1985年
小国町民体育館	葉デザイン事務所	1988年
熊本県立東稜高等学校	木島安史＋ＹＡＳ都市研究所	1989年
日立シビックセンター	坂倉建築研究所	1990年
熊本市営新地団地	早川邦彦建築研究室	1991年
東京都江戸東京博物館	菊竹清訓建築設計事務所	1992年
吹上新御所	内井昭蔵建築設計事務所	1993年
多摩霊園納骨堂	内井昭蔵建築設計事務所	1993年
紙の教会	坂茂建築設計	1995年

■■■

松井源吾氏が死去
構造家として一時代を築く

早稲田大学名誉教授の松井源吾氏が，1月11日に慶応義塾大学病院（東京・新宿区）で肺がんのため死去した。75歳だった。

1920年，新潟県の佐渡島に生まれ，43年に早稲田大学理工学部建築学科を卒業，52年同助教授に就任し，60年から教授を務めた。91年名誉教授になった際に，優れた構造家を表彰する「松井源吾賞」が創設された。

早大理工学部校舎（意匠：故・安東勝男氏）の構造設計で67年度日本建築学会作品賞を，「建築構造に関する研究・設計・技術指導の総合的業績」で93年度同学会業績賞を受賞した。

耐震壁の創始者として著名な故・内藤多仲氏に師事，構造設計の研究と実作の双方に力を注ぎ，ボイドスラブ，曲線梁，軸力ドームなどを考案，プロフェッサー・エンジニアとしてわが国を代表する存在だった。研究では光弾性実験の普及に努め，79年から日本光弾性学会理事を務めていた。著作に，『見える力学』（鹿島出版会），『スラブのはなし』（建築技術）などがある。

代表的な実作は，早大理工学部校舎のほか，「ホテル東光園」（64年，意匠：菊竹清訓建築設計事務所），「ホテルニューアカオ・レストラン」（78年，同：稲葉長司建築設計事務所）など。近年には，日立シビックセンター（90年，同：坂倉建築研究所），江戸東京博物館（92年，同：菊竹清訓建築設計事務所），多磨霊園納骨堂（93年，同：内井昭蔵建築設計事務所）などの実作がある。

松井 源吾氏▶

なお，松井氏が顧問を務めたO・R・S事務所は，今後も依田定和所長を中心に存続するという。松井源吾賞の今後については未定。

広い視野を持った「構造的建築家」

建築家
菊竹 清訓

40年間のお付き合いで，菊竹事務所の全プロジェクトについて設計以前の段階からご協力をいただいた。建設コストのことも建築家以上に熟知しておられた。建築家が考えた意匠を具体化するだけの構造家とは違う，「構造的建築家」だったと言える。

また，建築の構造が社会的にどのような影響を持つかという問題を常に考えておられた。他の建築関係者なら非現実的だと笑うに違いない「海上都市」にまじめに取り組んで下さったのもそのためだろう。

協働した最後の仕事は，95年6月にコンペで受注した「北九州メディアドーム」。軸力ドーム研究の集大成とも言えるものだ。ぜひとも竣工を見届けていただきたかった。（談）

生涯現役で新しい構造に挑戦

建築家
坂 茂

覚悟はしていたが，訃報に接した時はやはりショックだった。名声に安住せず，「必然性のある新しいこと」に挑む姿勢を最後まで保ち続けた偉大さ。先生に代わる人はどこにもいない。

「紙の建築」の構造をお願いするため，88年か89年ごろ初めてお会いした。当時，葉祥栄氏の木，竹の構造を手がけられた直後だった先生が，「今度は紙か」と言われたのを思い出す。その後，毎夜のようにファクスや電話で新しいアイデアを教えて下さるなど，密度の濃いご指導をいただいた。

計算の結果だけでなく過程も丁寧に説明される点が，普通の構造家とは違っていた。余暇に二人で酒を酌み交わしたのも懐かしい思い出だ。（談）

松井源吾氏逝去 ── 構造設計に大きな足跡

わが国の建築構造設計の発展に貢献した松井源吾早稲田大学名誉教授が，去る1月11日，肺がんのため東京都新宿区の病院で逝去した．享年75歳．

松井氏は，1920年新潟県生まれ．1943年早稲田大学理工学部建築学科卒業後，講師，助教授を経て，1960年より同大学教授を務める．同年工学博士．1968年より1981年まで，日本建築センター高層建築物評定委員．1979年より日本光弾性学会理事を務める．1991年早稲田大学退官後，同大学名誉教授に就任．同年には退官を記念して，優れた構造設計者を表彰する松井源吾賞が設けられている．主な受賞に，1968年日本建築学会賞(作品)受賞，1990年日本光弾性学会賞受賞，1993年日本建築学会賞(業績)受賞，最近の主な著書に『見える力学』『フラットスラブ構造のデザイン』(共に鹿島出版会)『スラブのはなし』(建築技術)など，構造設計をした最近作に「日立シビックセンター」(設計者：坂倉建築研究所／本誌9104)「東京都江戸東京博物館」(菊竹清訓／本誌9305)「再春館製薬女子寮」(妹島和世／同9110)「多磨霊園納骨堂」(内井昭蔵／同9307)「埼玉県立長瀞青年の家」(木島安史／同9308)などがある．

「構造的建築家」松井源吾氏の死を悼む

菊竹清訓

早稲田大学の名誉教授松井源吾先生がお亡くなりになりました．心から先生のご冥福をお祈り申し上げ，生前のご指導に対し，懐心より御礼と感謝を捧げたいと思います．今は，いくら万言を費やしてもいいつくせない，余りに偉大な天才的存在であったかを知らされ，ただ大きな空洞ができたようで，悲しみに打ちひしがれております．

先生とはたくさんの思い出がありますが，その中からいくつかのエピソードをひろって振り返ってみますと，その偉大さに改めて驚かされます．松井先生と私との出会いはいつ頃からだったか，多分40余年前で記憶が定かではありませんが，新潟博の設計を早稲田大学武基雄研究室で行っているとき，星のようなシンボルタワーを正20面体の核と長い3角錐で構成した構造案の検討のときのことでした．そのとき松井先生は即座に核に補強材が不要だといわれたのが鮮やかな印象として残っています．かなり不安でしたが，この形が実現してみると確かに必要はなかったのですが，これは構造家として大胆きわまる発言だったと思っています．

ブリジストンタイヤセールスの店舗計画で，コストを切り詰めたフラットスラブとスチールパイプ柱の架構は実にユニークで，しかも柱はアトランダムに建ててよい．これは，外壁パネル，内部間仕切りパネルなどの統一に大変有効だったのですが，とくにキャピタルを鉄板で解決するところは，実に面目躍如たるものがありました．さらに鉄筋ブレースをよじって使うというのは，変形してくると次第に利いてくるという愉快な解決で驚嘆させられました．

ボイド構法は，フラットスラブの延長で開発されたもので，壁・床をボイド版を使って，梁型や柱型がでてこない構造とすることができ，内部空間をすっきりしたスペースとすることができ，その実施例となった「浅川アパート」は実に美しく，見事で感激いたしました．

このボイドスラブをサスペンションで吊ることを考えた「東光園ホテル」の計画は私を驚喜させました．不安感さえ覚える限界設計は松井先生の独断場で，まったく新しい架構の提案となり，各階の和風の部屋に

とって構造がどれほど決定的役割を果たすものかを改めて強く意識させられました．
軸力ドームの開発をされたのは，新しい実験法の発見によるもので，研究は一挙に急展開をとげ，この架構方法が「北九州メディアドーム」に適用されたのは，1995年昨年のことです．1998年このドームの完成を待たず，他界されたのは本当に残念でなりません．
松井先生は，まだまだいろいろな分野の構造に積極的な関心をもたれておりました．そのひとつが海上都市です．1971年からのアメリカ海軍の実験の成果を引き継ぎ，独自にフローティングの実験を東京湾でされました．光弾性や膜実験は力の流れを目に見えるものにして，より合理的解決に方法的アプローチをつけるものでした．
1991年松井先生は松井源吾賞を創設され，すぐれた構造家の顕彰を始められましたが，この賞の創設で究極的に目指されていたのは「構造的建築家」の出現への期待ではなかったかと思います．これまでに5回，内外のすぐれた構造的建築家が選ばれ，授与されたのは，松井先生の永年の念願のひとつが果たされたもので，私費を投じて，賞を設定された功績を讃えたいと思います．このような松井賞の意図は明らかで，建築の空間を決定づける構造と，構造を創造する構造家の「構造的建築家」としての存在に対する社会的認識を高めたいということであったように思います．
考えてみますと，今世紀の現代建築の開拓者たちはRC造にしてもS造にしても，みんな実用と理論が一体となっていました．マイヤールの橋，フレシネ，オットーの膜，ペレーのコンクリートなどによく表れていますし，以後もよきエンジニアと協力して，はじめてすぐれた建築が生まれてくることは，歴史の立証するところです．歴史的事実をもっと直視すべきであることを教えられています．早稲田大学にも海洋学部をつくるという約束を果たされないで松井先生は早稲田を去られ，お亡くなりになりました．地球上に人間の居住環境をつくっていくには，陸上も海上もない．もっと大学教育の幅を拡げて人材の育成を考えたいという気持ちをもっておられたのです．
「メガストラクチャー」というテーマでテンションによる高さ1,000mの極超高層の研究や，人工土地，さらに海上フローティングによるリニアー都市の研究など，理工学総合研究センターでまだまだ指導していただきたい問題が研究途上です．このような素晴らしい，知的で謙虚で謹み深く，後輩の面倒をよくみていただいた大学の誇りである松井先生を神は非情にも召し上げてしまわれました．
いつも発言は簡潔で無駄がなく，実に鋭い言詞でした．しかし寡黙で，論文もスイスの天才構造家と同じように短く単純なものほどよいと常々いわれていました．実に論理的で明快，これは先生に接した者が一様に指摘するところでした．だから打ち合わせも大抵は短く，わずか数分で済んだものです．松井先生に長々と説明をする必要はなかったのです．勘が鋭く，肝心のところをポンといえば，それですべてが通じました．通じただけでなく，デザインの漠然とした意向を理論で体系化し，意図をより精密に，より合理的に経済的に具体化の道筋を示されました．鮮やかというか，見事というか．
正に松井先生はご自身，天才の名に値する，類稀な「構造的建築家」だったのです．このような不出世の松井源吾博士にご指導いただいたことを名誉とし，誇りにし続けたいと思っています．

きくたけ・きよのり／1928年福岡県生まれ／1950年早稲田大学卒業／1953年菊竹清訓建築設計事務所設立／現在東京建築士会会長，早稲田大学理工学総合研究センター客員教授，工学博士．

松井源吾先生を悼む

㈱日本設計構造設計群総轄部長
工学博士　**大越俊男**

本会名誉会員、工学博士松井源吾先生は、去る１月11日75歳の生涯を閉じられました。

松井源吾先生は、常々「僕の家系は男が長生きだから、90歳までは生きるよ」とおっしゃっていました。昨年の６月に右肺の半分を切除されましたが、10月21日の早苗会ではすっかりお元気になられ、私達を安心させて下さいました。その後、腰痛を訴えられ、再入院され、二度とお目にかかることができませんでした。

私が先生にお会いしたのは、大学４年の初めで、就職と卒論の相談に伺った時でした。当時、先生は早稲田大学理工学部の新大久保キャンパスの設計と監理に御多忙でした。私が構造設計を希望している旨を話しますと、「これからは大学院を卒業しなければいけない。就職しないで大学院へ入りなさい」といわれました。しかし大学院へ行くことは経済的にできませんので、構造設計への就職をお願いに行きました。先生は、少し考えられてから、「授業料を出してあげるから、大学院へ行きなさい」といわれ、その後の修士２年間、先生の個人助手１年間、博士３年間と、６年間にわたり、お世話になることになりました。

先生の授業は、実施設計を例題として、簡明な解を求め、構造計画を教えるものでした。当時は、計算機もなく、光弾性による解析を行なっていました。力の流れを可視化することがいかに有効な説得力をもっているかを、実施設計をとおしてお教え下さいました。

理工学部の本部棟、大教室棟、教室棟や実験棟等は、いずれも独特な構造形式を持っていて、創意・工夫に富み、またとない教育材料となっていました。先生は常に新しいものに挑戦されつづけました。設計と研究が一体となって、ボイドスラブや折版屋根、ワッフルスラブ等の開発を行なっておられました。

この多くの研究や設計をとおして、多くの教育者や研究者、実務者を育てられました。先生の研究や設計に対する

飽くなき挑戦魂は、私達みんなに受け継がれております。

私は先生の家から徒歩5分の目黒権之助坂に住んでおりました。子どもの幼稚園が先生のお宅の目と鼻の先でしたので、子供を送った帰りによく先生のところに伺いました。先生にそろそろ御恩返しを始めようと思い、その旨を先生に話しました。先生は私を軽くあしらわれ、「僕は弟子たちの世話にはならんよ。経済的に君たちに心配をかけることは、君たちを困らせることだよ。君たちのほうが僕より大変なんだから、心配をするな」といわれました。先生はおっしゃられるとおりに、私達に何も求めず、与えるだけあたえられて、去って行かれました。

先生はお酒をこよなく愛されました。私の大学院時代には、先生と帰り道が同じなので、「ちょっと飲むか」といわれて、2人でウィスキーを1本か2本あけました。お酒は大分鍛えられました。

先生は、物事にこだわりのない淡々とした生活を送られました。でも、最期まで病気を信じようとせず、生きることに信念を持たれ、煙草とお酒を止められたそうです。

昨年の春に、先生と2人でゆっくりお酒を飲む機会がありました。先生は、私が組織事務所へ行くことに反対され、ずっと事務所を開くことを勧められました。多分、組織の中では長続きしないと思われたのでしょう。先生の希望は、先生と同じように教育者になり、事務所を経営することだったようです。近年になり私が営業活動を始めたことを聞かれて、「君が営業をやるとは驚いたね」といわれました。

あれから1年を経ずして、お会いできなくなるとはまったく予想していませんでした。「僕は結婚するよ」といわれたのもその時でした。先生にお会いしてから30年後に結婚を宣言され、6月の松井賞授与式でも、これからの楽しみをみんなに話されました。そして、12月には御結婚されたというのに。

先生は、世界有数の構造家として、ヨーロッパやアメリカで講演をされ、世界中の研究者や構造設計者と広く交流を持たれていました。特に最近では、木造に興味を持たれ、木組みの研究の普及に努めておられました。設計だけではなく、本の出版や論文の投稿にも執念を持たれ、「君達には負けられないよ」と最期まで自慢されておられました。

また、先生はお金を貯めない主義で、教育助成のために大学へ多額の寄付をされました。松井源吾賞は、先生の退職金を基金として創設され、構造設計の進歩へ功績のあった世界の構造家へ授与されています。

先生は、私を始め、多くの弟子達の面倒を見て下さいました。そして私達が御恩をお返しすることなく逝かれてしまいました。私達はこの御恩を次の世代に継がせていただきたいと思います。先生の志を忘れることなく、新しい時代に向かって挑戦をいたします。

先生、どうか私達をお見守り下さい。そして、お叱り下さい。休まれることのなかった先生、ゆっくり、安らかにお眠り下さい。

合掌

松井源吾氏逝去

建築構造学に貢献した松井源吾早稲田大学名誉教授が，1月11日肺ガンのため死去した。

構造設計者として，独自の世界を築き，研究・教育・実践の3つを一体としてとらえた幅広い活動は建築構造学の発展に大きな足跡を残した。

■略歴

1920年　佐渡の生まれ
1943年　早稲田大学理工学部建築学科卒業
1948年　早稲田大学専任講師
1952年　早稲田大学助教授
1960年　工学博士
1960年　早稲田大学教授
1968年　日本建築学会賞(作品)受賞
1968～'81年　日本建築センター高層建築物評定委員
1979年～　日本光弾性学会理事
1990年　日本光弾性学会賞受賞
1991年　早稲田大学名誉教授
1994年　日本建築学会賞(業績)受賞

■最近の代表作品（設計者）

〈平成2年〉日立シビックセンター（坂倉建築研究所）
〈平成3年〉再春館製薬女子寮（妹島和世），熊本市営新団地A(早川邦彦)，千里国際学園（長島孝一）
〈平成4年〉アミューズメント・コンプレックスH(伊東豊雄)，早稲田大学戸山キャンパス図書館棟(菊竹清訓)，東京都江戸博物館(菊竹清訓)
〈平成5年〉熊本市営新団地C（富永譲），吹上新御所(内井昭蔵)，多磨靈園納骨堂(内井昭蔵)，早稲田大学大久保キャンパス理工系新棟(鈴木恂)，埼玉県立長瀞青年の家(木島安史)

■最近の主な著書

『見える力学』『フラットスラブ構造のデザイン』『中空スラブの計画と設計』『木造の継手と仕口』鹿島出版会
『スラブのはなし』建築技術

構造と力学に計り知れない情熱と好奇心を燃やしたロマンチスト松井先生！

樋口久吾

昭和42年春，早稲田大学理工学部の大久保キャンパスに超高層研究棟が完成したその年，私は初めて松井源吾先生に出会った。キリリッとした風貌で言葉少ない，見るからに大学教授という印象を持ったことを今でもはっきりと覚えている。松井研究室に出入りするようになったのは，磐田，田村両先輩の「振動ゼミ」に参加した大学2年生の時だった。松井研は，院生の先輩が中心となって，ゼミや卒論，修論の研究指導を行い，その上で，先生がご指導される自主性が尊重された研究室で，部屋の内部も，背の高い本棚は置かず，先生の机の周囲も間仕切られておらず，教授と学生というよりも，先輩と後輩といった感じで，気楽に話ができる雰囲気だった。これも先生のお人柄によるものだったと思う。

早稲田ボールのレストランで，お酒や食事を御馳走になりながら，よく仕事の話を伺った。そして私たちが，先生の著述内容などについて質問すると，先生は授業の時とは打って変わって，快活に大変愉快そうに話をして下さった。弾性論に興味を持つようになったわけも，お酒を飲みながら話されたことを覚えている。

先生は，光弾性やモアレ法による力の流れや，構造計画の研究に，熱心に取り組まれ，ビジュアルに形態的に構造を展開されていた。この手法は，私たちに大きな影響を与え，モダニズムの盛んだった当時，デザイン系の学生も大変興味を持って，先生の話に耳を傾け，熱心に質問していた。その授業が，有名な『構造計画入門』である。昭和50年頃から，先生は「曲線梁

の理論」の完成に没頭され，よく研究室で紅茶の中にウイスキーを入れて飲みながら，考え込まれておられた。毎年6月にいただく「稿」は，時の流れの中での先生と大勢の人々との交流を本にまとめられたものだった。折につけ，自筆の葉書をくださり，お元気でご活躍の様子を伺い，自分もがんばらなければと感じていた。

昨年12月24日，慶応病院にお見舞いに伺った折も，ベッドの上に起きられて，いつものようにちょっとはにかみながら，「結婚のお祝いは，いつしてくれるのか」と尋ねられ，磐田さんと相談しておきますと答えたのに，突然の悲報に驚いてしまった。もう，うまい構造設計をして，先生の批評を受けることはできない。先生が逝かれるということは，私たちの青春時代の中心の灯が消えてしまったようで，大きな悲しみである。宝物を失した感がする。松井先生自身がいつも青春の内におられ，私たちもいつまでも傍らにいられると思っていたのに。先生，また来世でも一緒にやりましょう！ご冥福をお祈りします。

（ひぐち　きゅうご）

（建築技術）

松井源吾氏逝去——構造設計に大きな足跡

わが国の建築構造設計の発展に貢献した**松井源吾**早稲田大学名誉教授が，去る1月11日，肺がんのため東京都新宿区の病院で亡くなった．享年75歳．

松井氏は，1920年新潟県生まれ．1943年早稲田大学理工学部建築学科卒業後，講師，助教授を経て，1960年より同大学教授を務める．同年工学博士．1968年より1981年まで，日本建築センター高層建築物評定委員．1979年より日本光弾性学会理事を務める．1991年早稲田大学退官後，同大学名誉教授に就任．同年には退官を記念して，優れた構造設計者を表彰する松井源吾賞が設けられている．

主な受賞に，1968年日本建築学会賞（作品），1990年日本光弾性学会賞，1993年日本建築学会賞（業績）など，最近の主な著書に『見える力学』『フラットスラブ構造のデザイン』（共に鹿島出版会），『スラブのはなし』（建築技術）など，構造設計をした最近作に「日立シビックセンター」（設計者：坂倉建築研究所／『新建築』9104），「江戸東京博物館」（菊竹清訓／同9305），「再春館製薬女子寮」（妹島和世／同9110），「多磨霊園納骨堂」（内井昭蔵／同9307），「埼玉県立長瀞青年の家」（木島安史／同9308）などがある．

本誌では，松井源吾賞の審査員を第1回より務められている構造家の青木繁氏に追悼の文章をお願いした．

追悼　松井源吾先生

青木繁（構造家・法政大学教授）

早稲田大学名誉教授・松井源吾先生ご逝去の報に接し，遠い国へのあまりにも早い旅立ちに申し上げる言葉もありません．

第二次大戦直後の混乱の時代に，はじめて早稲田大学で教鞭を執られてより，40有余年の間，終始建築教育に情熱を傾け，数え切れないほど多くの教え子を育成され，社会の第一線を担う人材として世に送り出されたのです．

先生との出会いは，先生が国内留学制度によって，私が大学院時代を送っていた東大教授・坪井善勝先生の研究室に来られた時でありました．その意味では，私にとって兄弟子ということになりますが，当時の端正な松井先生には何か近寄り難い思いを抱かされたものです．

先生のご研究は，平面的，立体的に拡がりのある問題に的を絞られ，特に数値解析の困難さを克服するため，光弾性実験を駆使して局部的な応力集中の問題に取り組まれ，構造の研究分野における光弾性応用のパイオニアとして新しい研究態勢を確立されたことは特筆に値するものといえましょう．

また，数学や力学に基礎を置いた平面板，曲線梁，直交異方性材の捩れ等の諸問題には解析的に端正な解が導かれていて，研究の厳しさとスマートさが示されています．

先生はまた，構造設計の立場から，数多くの建築の創造活動に参加されています．「構造設計から研究テーマを，研究成果を設計へ」を信条とされて，研究と設計とを対等の重みでとらえ，密接な関連性を保ちながら優れた研究の成果と，素晴らしい建築空間の獲得に情熱を注がれ，一貫してその姿勢を崩さず信念を貫かれている姿は，多くの人びとに感動を与え共感を呼び起こしたのでした．

研究の成果を現実に応用された中空スラブ構造，曲線梁の理論を建築デザインに活かされた提案，接合部に関する研究の成果を取り入れた大スパン木構造など，いずれも建築空間のデザインに大きく寄与され，建築界に与えた強烈な印象と，その影響力はきわめて大きいというべきでありましょう．

早稲田大学退任を記念して制定された「松井源吾賞」は，若い構造家を顕彰して構造界の活性化をはかるもので，その活躍を期待しておられた姿は，後進に示された先生の温かい心と，構造教育に注ぐ並々ならぬ情熱を示されたものということができましょう．

敬愛する先生のご逝去は，後に続く私たちにとって，かけがえのない道標を失ったものというほかはありません．

悲しみの気持ちを込めて，先生のご冥福をお祈りいたします．

（新建築　住宅特集）

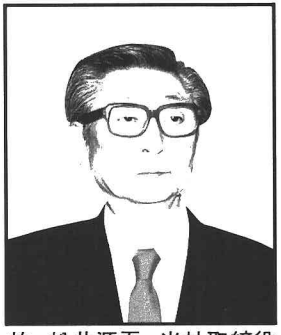
松井取締役　逝去さる

松井源吾・当社取締役（非常勤）が、かねてより病気療養中のところ、平成８年１月11日、逝去されました。享年75歳。

１月18日にお通夜、翌日19日、上野寛永寺において告別式が、しめやかに執り行われました。

社員一同、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

また、稲村本部長に生前の松井取締役のご功績、思い出の数々を弔辞として寄せて頂きました。



故　松井源吾　当社取締役

弔　　辞

◆当社との深いつながり◆

松井先生が亡くなられたとの知らせを聞き、ほんのわずかに期待した奇跡はやはり起きてくれなかったのかと、がっくりするとともに大きな悲しみで、しばらくボーッとなったままでした。

先生は、私の人生に大きく影響を与えて下さった偉大な方で、当社の非常勤役員をされていて、役員会にも時々いらっしゃっていました。先生と当社との関係は大変に古く、先代の杉村社長がまだ独身の頃からお世話になっ

力学の力無くしては、決して実現しなかったものばかりでありました。

◆強い探求心◆

また、先生は学者として数々の立派な研究業績を挙げられたばかりでなく、500人以上の優秀な弟子を育て、特に学校の先生としては珍しく、実務として設計を行われ、非常に多くの傑作を生み出されました。その上、多くの設計事務所や会社の顧問をされ、気軽に相談にのり指導を行われていました。さらに退職金を提供されて松井

てきたそうです。当時、ペデスタルの櫓が木製であったのを鋼製にしようとして櫓のトラスの設計をお願いしたのがお付き合いの始まりだったそうです。その後、当社の顧問として技術的なご指導ばかりではなく、先生の設計された建物、弟子たちの設計した非常に多くの物件、幅広い人脈の紹介、弟子で大学の先生をなさっている方々から、優秀な孫弟子を社員として頂くなど、いろいろな面でお世話になってきました。

◆その人となり◆

先生は、中学時代から続けてこられた水泳で健康を維持されると共に、お酒を大変愛されていました。松井研究室は、お酒の大好きな人たちが極めて多かったのですが、先生はお酒を飲まない私でも、快く酒の席に加えて下さいました。

先生は権威を恐れず、決して偉ぶらず、また人をバカにせず大変な人格者であり、非常に多くの人々から尊敬されていました。菊竹先生の言葉をお借りすると、先生は日本が生んだ構造の天才でありました。そして私が常に尊敬し、慕い、目標としていた力学の天才でありました。先生は力学のセンスは学生になって学ぶものではなく、その人が小さい時から育ってきた過程で自然と身につくものだと言われており、私も何となく同感を覚えていました。

日本を代表する建築家である菊竹清訓、内井昭蔵、黒川紀章他の各先生方の作品は、松井先生の構造センスと源吾賞』を設立され、毎年国内外の優れた構造設計者に賞と励みを与え、その育成にも力を注がれていました。

またその他に先生は、建築ばかりではなく海洋構造物、その他様々な事に興味を示され、貪欲に挑戦されて不可能を可能にされてきました。私が当社に入社させて頂いてからも、先生の面倒見の良さに甘えて公私ともにお世話になりっぱなしできました。私が学生時代に先生から頂いた一言、「お前、感がいいなぁ」は私だけの宝物としてはっきりと心にしまってあります。弟子たちの全員が思っているように、私も先生の弟子の一人の末席に加えて頂けた事を非常に誇りに感じております。

先生は文字通り生涯現役を通された方でした。亡くなられた当日でさえも、意識が薄れて行くなかで何か計算でもされているのか、数字をブツブツつぶやかれながら息を引き取られたとお聞きしました。

◆ご指導を大きな力に◆

当社が先生から受けた、直接、間接のご指導は、今後きっと会社発展の大きな力になるものと信じております。

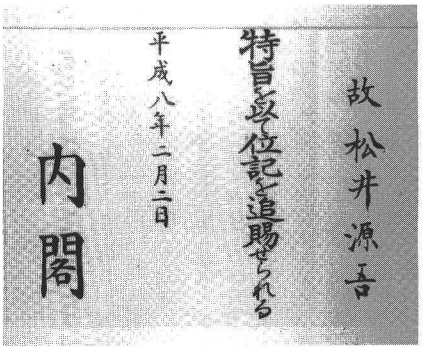
先生、本当に長い間お世話になりましてありがとうございました。こよなく愛された佐渡の地に安らかにお眠り下さい。

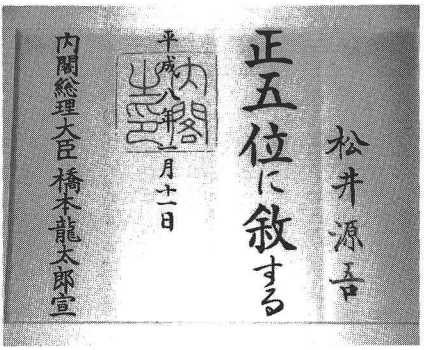
戒名は、理深院殿広博日源大居士

合掌

技術本部　稲村 利男

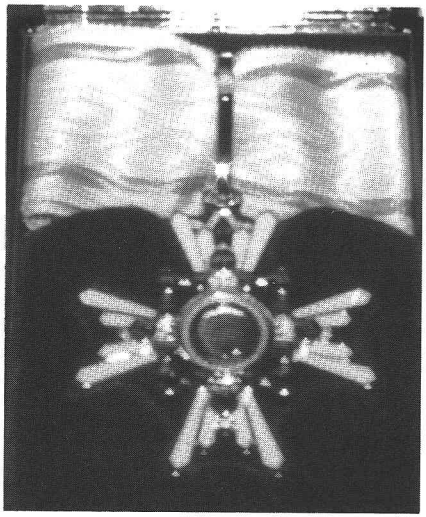
叙　勲


故松井源吾
特旨を以て位記を追賜せられる
平成八年二月二日
内閣


松井源吾
正五位に叙する
平成八年二月十一日
内閣総理大臣　橋本龍太郎宣

日本国天皇は松井源吾を
勲三等に叙し瑞宝章を授与する
平成八年一月十一日皇居において
重をおさせる
平成八年一月十一日
内閣総理大臣　橋本龍太郎
総理府賞勲局長　石出宗秀
第二二〇二六号

勲三等瑞寶章



偲ぶ会

悼　辞

株式会社栗本鐵工所
代表取締役社長　前田幸雄

只今ご紹介に預かりました前田でございます。

松井先生と関係深い多くの諸先輩、ご友人がいらっしゃる中で甚だ僭越ではございますがご指名でもあり、謹んでご挨拶申し上げます。

昨年末、先生が病に臥せられ療養に専念されておられることを御伺いし、一日も早く元気に回復されんことをお祈り致しておりましたところ、年を越した去る１月11日、ご逝去されたとの報に接した時、言葉も無く、驚きと悲しみに打ち沈みました。

今ここで改めて先生のご遺影を前に、先生のきさくでやさしいお人柄が思い出されます。

先生と当社との出会いは、今からおよそ35年前、私共が日本で初めて空調用のスパイラル・ダクトを開発した時でした。

当時、同じ早稲田大学の井上宇市（ウイチ）先生のご指導を受けておりましたが、それをご縁に松井先生とのお付き合いが始まりました。

爾来三十有余年、主として中空スラブ工法のご指導を受けましたが、中空スラブ工法に関しまして、先生が残された業績は筆舌に尽くし難いものがございました。

私共にとりましても、今日のクリモトの建材部門の存在そのものが先生なくして考えられません。

当社の社員は建築技術に関しほとんど素人同然であります。

門前の小僧で、先生からご教導を頂いているうち、それなりの知識を身につけて、業界へ出入りさせて戴いているところと思います。

ある時、私共の営業の担当に、先生は「私の周囲の方は、その道のプロばかりで、お付き合いして息が抜けませんが、クリモトの社員の皆さんは、その点楽しくお付き合いできます」とおっしゃられたそうですが、私共のような素人を相手に三十年を越える永い年月ご指導を賜りましたことに言葉で言い尽くせない感謝の気持ちで一杯でございます。

先生に接して頂いた私共の社員全てが、先生のお人柄に感銘を受け、先生のファンになりました。

私共の社員一人一人にまで、先生は実に丁寧にそして誠意をもってご指導下さいました。

先生とのお付き合いが深まるにつれ、当社の歴代の会長、社長を含め多くの社員が先生にご交誼を頂くようになりましたが、先生は一人一人細かく、記憶にとどめて下さいまして、ご支援下さったのであります。

実にこまやかに気配りされる方でございました。

先生とのお付き合いは仕事の上だけではありませんでした。

仕事以外でも、私達は先生から、人に対する思いやり、謙虚さ、厳しさ、やさしさ等、人が生きていく上での多くの教訓を学びました。

尊敬し、敬愛申し上げる先生が永遠に旅立たれたことは、まことに寂しい思いで一杯ですが、本日改めて永年のご指導、ご厚情を賜りましたことに心より感謝申し上げますとともに、先生の志を引き継いで微力ではございますが、努力致しますことをお誓い申し上げて追悼の言葉とさせて頂きます。

松井先生、本当に有り難うございました。

どうぞ安らかにお眠り下さい。

平成8年3月11日

（偲ぶ会　於早稲田大学）

追悼の言葉

菊竹清訓

松井源吾博士が偉大な存在であったことは、誰もがよく知っているところですが、実に素晴らしい天才的構造家であり建築家であったと思います。

日本の誇る早稲田大学理工学部建築学科構造研究室を指導され、二十有余名の博士を輩出するなど、すぐれた類稀な学者であり、教育者でありました。

先生の突然の逝去の悲報に接し、こんな無念なことはありません。まだ私にとって信じられない想いですが、今は生前に賜りました懇篤なるご指導に対し、心から深く、ふかく感謝申しあげたいと存じます。

ここに謹んで御紹介申しあげたいことは、先生は私費を投じて構造家を顕彰する松井賞を創設されました。ご指名により、その選考委員長を務めさせて頂きました。誕生日が授賞式で本年（1995年）で第六回を迎えるところです。受賞者には関西空港のオーバーラップのピーターライス氏や、NYの国際貿易センターのロバートソン氏、またマドリッドのオリンピック施設の川口衛先生他多数の方々がおられます。

松井賞の目指す「構造的建築家」の社会的必要性はいよいよ高まっており、エッフェルやフレシネ・ネルビーなど構造的建築家によって切り拓かれた現代建築は、いまもワックスマンやフーラーやトロやフライオット等によって続けられ、建築の革新に構造的建築家の存在が大きいことを知らされます。

構造的論理性、空間の体系的秩序、建設の合理性からみて構造的建築家なしの建築はなく、建築の前進もあり得ませんでした。

松井先生は、つねに新しい構造的発想を追求され、新しい技術の開拓に、能力を傾注されました。先生の生涯は、正しく構造的建築家に捧げられ、その確立をめざすものであったといえます。

松井先生は、物静かで、大変無口でしたが、私には実に楽しく優しい、年長の兄という感じで、約四十年にわたって幾多の計画をご指導下さいました。

いつもジッと聞いていて、ポツリと洩らされる短い、しかし鋭い美事な解決

案に、ただ唯驚嘆させられるばかりでした。あとでその正当性についての根拠を伺って、さらに深い尊敬の念をもちましたが、そこには明らかに直観的に何か閃くものがあったことは間違いありません。

松井先生の、この強烈な魅力は、まるで円月殺法の眠狂四郎といった趣で、天才のみに与えられた感動的刺激でした。

その一部を取り上げてみますと、例えば1960年代につくられたフラット・スラブ構造があります。

(1) スラブは200ミリ厚の軽量コンクリートで、これを支えるスチール・パイプの柱は、4メートル間隔なら、どこに建ててもよい、柱頭はスチール・プレート一枚で、スラブ筋を溶接する。ブレースは19ミリ筋をよじったもので、変形するほど利いてくる、というものでした。

何しろ、フラットの天井ですから仮枠が実に簡単で、経済的だということで、ブリヂストン・タイヤ・セールスの販売チェーン店が2階建低層ということもあって、これで設計いたしました。このため、外装、間仕切とも標準パネルとすることができ、自由な平面が実現できました。

(2) これが1970年代のボイド・スラブ構造に発展することになりました。スラブにボイドを入れることで、柱間隔をとばすことができ、カンティレバーも自由にとることができるからです。

しかしこれには、相応しいボイドの材料が必要でしたし、またコンクリート打設時のボイド・パイプの浮き上がり防止や、スラブの上下配筋上に工夫がいりました。さらに、事後のクリープ現象への対応も求められました。新しいボイド・スラブ工法は、これらの解決と、法的手続きなど、日本各地で講習会や、各種出版物で広く普及につとめられた功績は計り知れないものがあります。

そして、その前提には、特許の公開がありました。

当時私の述べたもののなかの「スラブがスペースを限定し、拡張する」という設計仮説は、このような松井先生の構造技術が背景となっての発言でした。駿河銀行支店群は殆どこのボイド構造でつくられておりますし、島根県立図書館や、浅川アパートも、この工法による設計でした。今では、松井・菊竹の特

許とは知らないで使われている状況で、施工しやすく、合理的な技術から、ひろくアジア各地にまで普及しております。

この他、松井先生のユニークさは「切れ目を入れた耐震壁」とか（これは松井賞のメダルに表現されています)、また、「雨の流れる方向にかける梁」とか「目に見える力学」など沢山あります。

なかでも大空間の架構で、モアレ法を使った「軸力ドーム」の開発が、松井先生のもとで、でき上がりました。私はこのドームの技術でコンペに応募しました。東京フォーラム、新潟コンペ、熊本コンペなどですが、みんな落選して、昨年北九州市立のマルチ・メディアドームのコンペで、やっと先生の期待にそえることになりましたが、完成をみることなく他界されましたことは、何とも残念でなりません。生前に、不肖の弟子が「軸力ドームの研究」で、博士論文を提出できましたことが、せめてもの恩返しと考えております。が先生の贈物でもありました。

いますすめております理工総研での「メガストラクチャー」をテーマとする、テンション構造による高さ1000 mの極超高層ビルや、浮体による海上リニアー都市、解体組立の可能な段状人工土地、軸力ドームによる巨大空間の研究など、まだまだ松井先生に御指導いただきたいものが残っております。これらの研究をやりとげることが、残された者のつとめと覚悟を新たにしております。

松井先生、本当に永年にわたって、御指導を賜りましたことにたいし、改めて心から深く御礼を申し上げます。

私は先生のことを決して忘れません。天国からキッとした眼で見据えていて下さるものと考え、これからも技術と造形の統合について、考えつづけたいと思います。

平成8年3月11日

（偲ぶ会　於早稲田大学）

このほか、多数の方々に「追悼の言葉」をいただきました。この場をかりて、厚くお礼申し上げます。　　松　井　悼　辞

早稲田大学　大隈講堂

96. 3. 11

松井源吾先生を偲ぶ会

平成８年２月10日

「松井源吾先生を偲ぶ会」のご案内

早稲田大学理工学部建築学科

拝啓
春寒の候、皆様にはご健勝のこととお慶びを申し上げます。
さて、本学名誉教授松井源吾先生は、去る１月11日お亡くなりになられました。
下記の如く先生を偲ぶ会を催したく存じます。
先生との最後のお別れに、ぜひご出席を賜りたく謹んでご案内申し上げます。

敬　具

記

日時　平成８年３月11日(月)午後２時～４時
場所　早稲田大学　大隈講堂

以上

誠に勝手ながらご供花ご供物はご辞退申し上げます

「松井源吾先生を偲ぶ会」懇親会

拝啓　貴下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。
「松井源吾先生を偲ぶ会」（大隈講堂午後２時～４時）に引続きまして，弟子一同が集まり，お酒を汲みかわし，先生を偲ぶ会を開催致したく存じます。
皆様方のご出席をお待ち申し上げております。

敬　具

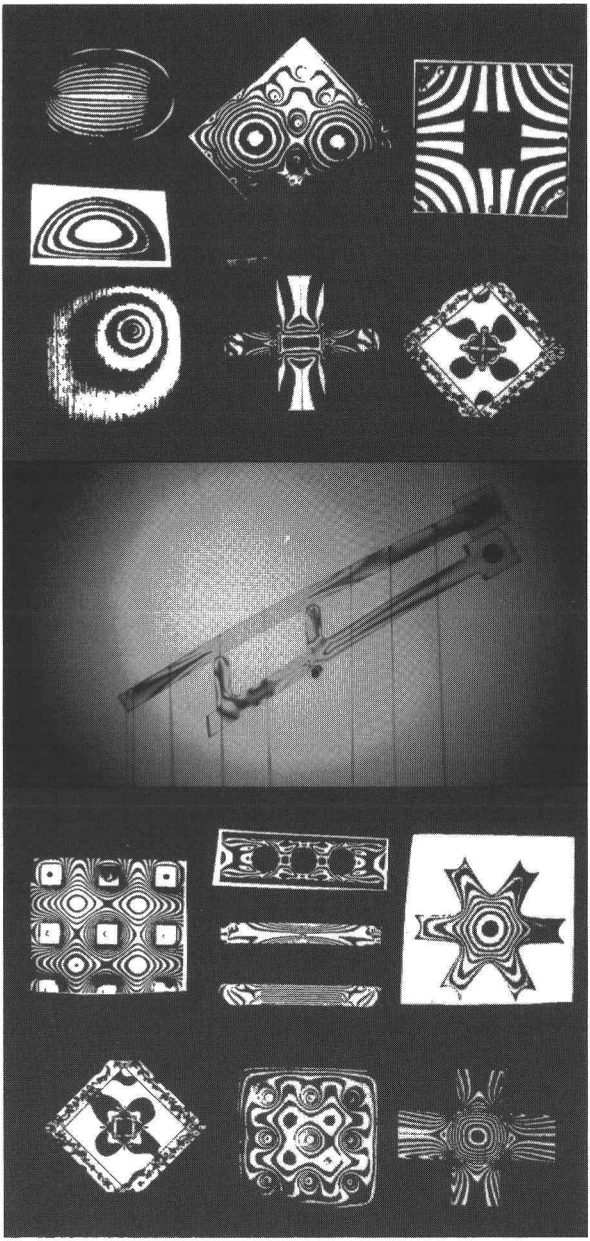
平成8年2月

幹事　大越俊男
長井啓次

記

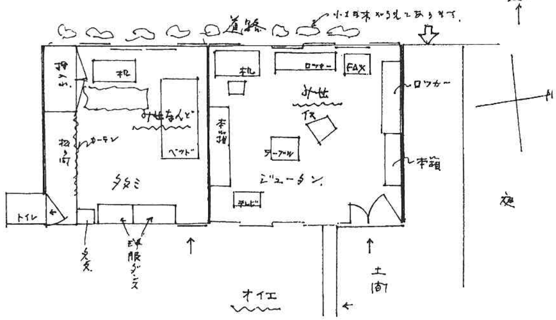
日　時　平成８年３月11日(月)午後４時30分～６時
場　所　リーガロイヤルホテル早稲田
「ダイヤモンド・ルーム」
（TEL　5285−1121）
会　費　１０,０００円

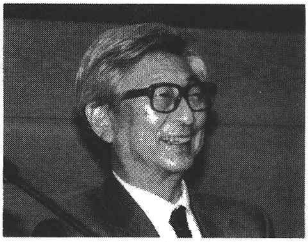
尚，準備の都合上２月29日までにご返信ください。
電話連絡先：㈱日本設計構造設計部　大越
TEL　03−3344−2311
FAX　03−5325−8378



'94. 1. 15.

15日朝、空は青空、風邪もほぼ全快となり快適。
これからは風邪をひかないよう気をつけること。
今日は弟は休みなので未だ起きてない。私は起床時は少し早め
早よい。　朝食(コーヒー、トースト1枚、ゆで卵、牛乳)
終り、これを書いています。
昨日、弟と従兄、渡辺三郎さん、従弟山本修巳さん、
ともに この私の居間【みせ】(仕事部屋)ほめてくれました。
改めてながめて、気に入っています。(下図。)




1995年6月8日／建築会館にて

海をみて建築を考えているときが
もっとも幸福なとき

謹啓

先般　夫　源吾　永眠に際しましては御鄭重な御弔詞ならびに御厚志を頂き御芳情誠に有難く厚く御礼申し上げますお陰をもちまして　去る二月二十八日

理深院殿広博日源大居士

七七日忌に当り内々にて追善法要を相営みました

また　三月十一日には早稲田大学の御厚志により大隈講堂にて盛大な偲ぶ会が催され多数の方々の御参会を頂きまして心から感謝致しております

つきましては故人に賜りました御厚志は松井源吾記念会に寄附をさせて頂き御厚情の御返礼に代えさせて頂きました何卒御諒承の程お願い申し上げます

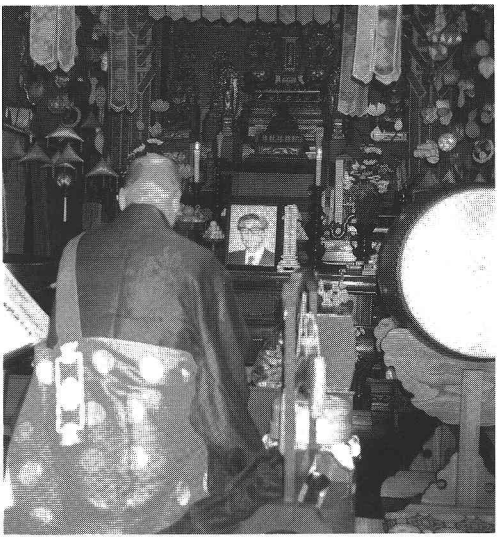
ここに故人に対する御厚誼を深謝いたし略儀ながら書中をもって御挨拶申し上げます

敬具

平成八年三月

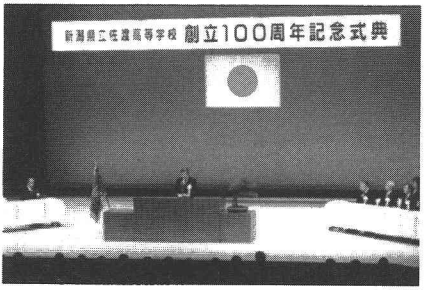
松井政枝

納　骨



96. 9. 22

獅子ヶ城会館竣工



佐渡高等学校創立100周年記念

獅子ヶ城会館 竣工式

と　き：平成8年11月30日（土）
10：30～11：30

ところ：佐渡高校獅子ヶ城会館

竣工式次第

○ 開会のことば
○ 式辞
○ 工事経過報告
○ 祝辞
○ 学校長挨拶
○ 万歳三唱
○ 閉会のことば

「佐渡高校の位置」碑建立紹介

・石碑建立に至る経過報告
佐高緯度経度測定委員会代表　豊原久夫

・感謝状贈呈
石碑贈呈者　野口石材店様　真野町吉岡

北緯	38度00分10.249秒
東経	138度19分35.402秒
高さ	28メートル（±1メートル）

経過の報告

平成５年　８月 24 日　同窓会総会にて 100 周年基本構想承認

12 月 20 日　同窓会、PTA合同役員会　記念事業の取り組みについて協議

平成６年　１月 12 日　同窓会常任委員会　記念会館建設について全員同意

３月　４日　同窓会、PTA 合同常任委員会

具体的青写真、見積り、建設場所の検討

設計依頼先は松井源吾早大名誉教授に決定

３月 17 日　松井源吾氏、実地検分に来校、快諾を得る

設計は「菊竹清訓建築設計事務所」に依頼

５月 23 日　校内幹事会　募金目標と具体的方法

６月 14 日　PTA総会　会館建設と募金について承認

７月　１日　同窓会各支部長、評議員合同会議にて会館建設にむけての募金推進について協議

７月　５日　関信越国税局に「記念事業に関する費用の特定寄付金等の確認申請」を提出

平成７年　１月 17 日　建設用地に畑地買収

８月 21 日　同窓会総会　記念会館建設案決定

平成８年　３月 20 日　建設用地に池地買収

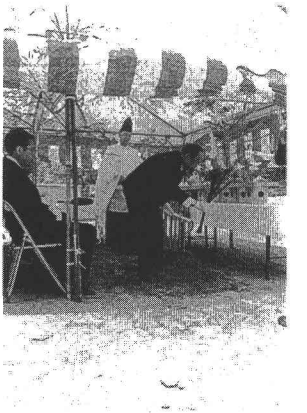
５月 18 日　会館建設安全祈願祭

10 月 20 日　創立 100 周年記念式典・祝賀会

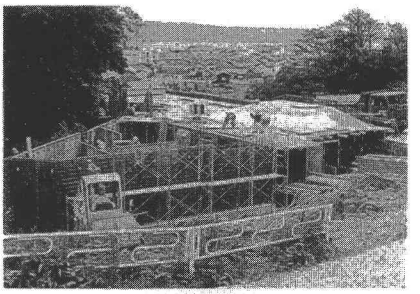
11 月 30 日　獅子ヶ城会館　竣工式

工事経過

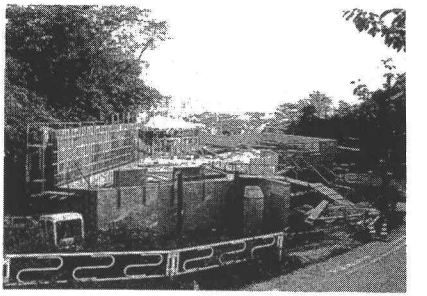
1996年3月下旬



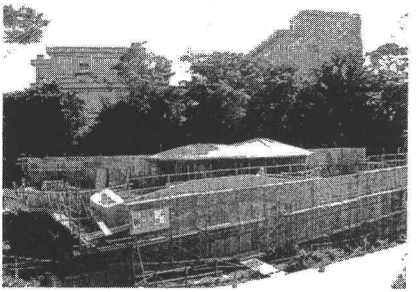
1996年5月



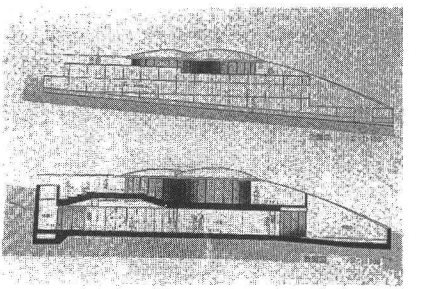
1996年8月



1996年9月



1996年10月



完　成　図

獅子ヶ城会館の建設に感謝して

前佐渡高等学校長　豊原久夫（昭和29年卒）

創立百周年を記念して、わが佐渡高校に、「獅子ヶ城会館」を建設して頂いた。

母校へのこのような素晴らしいプレゼントは、全国に五千有余の高校ありと言えども、他に類を見ることができない。

ここに、同窓生、PTA、地域の皆様方から頂いたこの記念事業に対する温かいご理解と絶大なるご支援に対し、衷心より深甚なる敬意と感謝の意を表するものである。

この「獅子ヶ城会館」の設計に当たり、陣頭指揮に立ってご尽力されたにもかかわらず、竣工を見ずして他界された、故松井源吾先生（昭和一三年佐中卒　第三八回生）に深く感謝申し上げ、小稿では、松井先生の人生とご業績及びお人柄について述べさせて頂き、先生のご冥福をお祈り申し上げたい。

故松井源吾先生を弔う

平成八年一月一九日、ぼたん雪が降り頻る中、東京上野の寛永寺において、故松井源吾先生の葬儀が、多くの参列者が見守る中、しめやかに執り行われた。

松井先生の佐渡中学校時代の恩師で、九州在住の熊本学園大学名誉教授甲斐弦先生から寄せられた弔辞は、今でも私の脳裡から離れない。

「君は、昭和一三年三月に佐渡中学校を出たね。四年間君たちに英語を教えていた僕は、同じ一三年四月に佐渡を去り、内蒙古の西の果ての包頭（黄河の北岸にある河港）に新設された蒙古中学校の副校長として赴任した。

佐渡の思い出は、今も心に刻まれて消えない。校舎脇の素掘りのプールで、君も僕もよく泳いだね。「縞」（松井先生ご自身のその年の歩みを綴った年報で、学問と人生及び郷里を語った冊子）の二一号に『蛇と泳いだ泥んこ池』と題して、君は書いている。僕の思い出は、君と並んで泳いでいたら、突然君が、「先生蛇です」と叫んで、縞蛇か小豆蛇か、一メートル近い奴が我々の間を悠然と鎌首をもたげて泳いでいたのだ。「わあっ」と、二人共岸に逃げた。

しみじみ思うのは、あの頃の教師と生徒を結びつけていた絆の固さだ。授業が終っても、我々はすぐ家には帰らなかった。生徒と一緒に柔道をやったり、剣道をやったりして、日暮れまで学校に残っていた。

生徒は、我々には、血のつながった存在だった。生徒の親御さんが亡くなりでもしようものなら、何キロという山道を歩いてお悔みに行ったものである。村祭りの時には、「何の風情もこれなく候へども」という風流な招待状に誘われて生徒諸君の家を廻り、勧められるままに酒を飲み過ぎて醜態を演じたものである。

松井君、戦争中、君は内地で爆撃を受け、僕は内蒙古で、又、中国の山西省で、当時の八路軍、今の中

共軍と戦い、お互い運よく命だけは助かって今日まで生きたね。

君は、建築家、僕は文学。進路は違うけれど、共に一筋の道を歩んだね。僕が文学賞を貰ったりすると、君は直ぐ大きな花束を送り届けてくれた。「松井君よ、花は誠に有難いけれど、豪華過ぎて、これでは、先ず家から改築してかからねばならぬ」と。君の親切、今も忘れられない。

実に立派な生涯だったよ。どこに出しても恥かしくない足跡を君は残してくれた。君の育てたお弟子さんたちが、君の業績を受け継いで、更に立派なものに仕上げて下さるものと、僕は固く信じている。」

教え子に先立たれた恩師の、心底からのこの叫びに、私はただ、在りし日の松井先生の素晴らしさが、眼前に彷彿として来るのを覚えるのである。

松井先生の生涯と業績

○大正九年（一九二〇年）六月三日、松井源吾先生は、真野町新町四五八番地において、父松井源内（長年新潟県議会議員、勲四等瑞宝賞受章、真野町名誉町民、享年九二歳）と、母松井久子（享年三〇歳）の長男として誕生。祖父松井源内は、北海道寿都で、呉服太物と海産物商（店の商標は㊄）と酒造りを営む成功者であった。先生のお名前「源吾」は、祖父の源とマルゴの五からとったそうである。先生は名門の御曹司であるが、不幸にして、母上は二歳の時に他界されたので、その後は祖母松井キヨに養育された。したがって、祖母に対する思慕の念も深いものがある。

○真野尋常小学校を卒業した源吾少年は、旧制佐渡中学校へ入学。在学中は、勉学に精進することを本旨としながらも、水泳部に入り大活躍した。

「佐渡中学校にプールが出来たのは、吾々が四年生の時で、それまでは、グラウンド横の池がその代用であった。水の澄んでいるのは、春先だけで、泳ぐようになると、たちまち泥池となり、丁度ミルク入りのコーヒーの色であった。（水泳の練習中、蛇からの激励を受けたことについては、前述）佐渡中学はこの年はじめて新潟県の大会で優勝したのである。」

（「縞」二一号）

○昭和一三年佐渡中学校を卒業、早稲田学院へ入学

○昭和一八年　早稲田大学理工学部建築学科卒業（二三歳）

○昭和二三年　早稲田大学専任講師（二八歳）

○昭和二七年　早稲田大学助教授（三二歳）

○昭和三五年　工学博士（四〇歳）

○昭和三六年　早稲田大学教授（四一歳）

○昭和四三年　日本建築学会賞（作品）（四七歳）

○平成二年　日本光弾性学会賞（六九歳）

○平成三年　早稲田大学名誉教授（七〇歳）

○平成五年　日本建築学会賞（業績）（七二歳）

日本建築学会賞受賞

この賞は、松井先生の建築構造に関する研究、設計、技術指導に係る総合的業績から授賞対象となったものである。

構造工学の研究では、永年の研究と構造計画・構造設計との有機的総合化を目指し、数々の優れた建築作品群とそれらを理論的に支える多くの先駆的研究論文・著作を世に発表して来た。研究の手法としては、二次元弾性理論解析と、解析が得られにくい複雑な構造を対象とした光弾性実験、あるいはモアレ縞実験を適用して駆使した構造物の計画・設計方法を確立させた。光弾性の代表例としては、地震時のラーメン柱梁接合部、有孔梁、開口壁などがあり、応力集中問題解明のパイオニアであり、第一人者である。膜実験法は、膜のたわみと力の流れ

の相似性に基づいて提案されている手法で、モアレ縞で視覚的に力の流れを把握し、平面板における曲線梁の配置決定などに用いる。

構造物の計画・設計の研究で代表的なものは第一に中空スラブに関するものである。約三〇年前に研究、開発に着手し、一九六三年に館林庁舎に適用、現在は一般に普及している。著書「中空スラブ構造」、「中空スラブ設計」は普及の原動力となった。

その第二は、流線による曲線梁の提案で、著書「見える力学」「Ｆｒｉｎｇｓ」は、国際的にも高く評価されている。

第三は、木造に関するもので、特に大スパントラス構造の作品としては、小国町交通センター（一九八八年）を始めとして、トラス接合部の補強法を提案し、捩りを受ける柱を含めた、これら直交異方性材の弾性、捩れ問題等に真正面から取り組んで、これを解決し、実施設計に結びつけている。

木造建築については、在来工法に加えて、新しい構造法にも、工学的知見を加え、積極的に評価することによって、この種の構造の発展に大いに寄与している。

以上の多くは、大学の教育、指導を通じて行われ、多くの若き研究者を世に送り、社会に貢献すると同時に、数多くの論文、著作、あるいは作品集の発表は、建築構造の普及啓発に非常に貢献している。

このことによって、日本建築学会賞が贈られたのである。

（「縞」一九号抄録）

松井源吾作品集（一九五五～一九八九）は松井先生が手がけた作品の粋を集めた冊子であるが、その見出しには、「構造設計から研究テーマを、研究結果を設計へというのが私の信条である。」としており、この一文からしても、こうした先生の建築学に対する真摯な姿勢が、日本建築学会賞受賞に結びついたものと考えられる。

松井源吾賞の設立

松井先生の大学人としての業績として今尚評価され、大切にされているものに、松井源吾賞授賞がある。

松井先生には、多くのお弟子さんが居られたことは、あまりに有名である。

先生は、その弟子の育成のために早稲田大学をご退職になられる時、退職金を投じて育成基金を設立された。これが今、松井源吾賞の基金となっている。

この松井源吾賞の授賞は、早大建築出身者ばかりでなく、他大学出身の建築家にも広く門戸を開いている。

ちなみに、佐高での私の教え子である坂下建築事務所の一級建築士坂下実氏（佐高第一九回、昭和四四年卒）も、大学時代には東京で松井先生にお世話になった経験がある。同様に、時間工房の一級建築士古河原（倉内）美津子氏（佐高第一七回、昭和四二年卒）も、仕事上大変お世話になったと言っている。また、植木組の幹部である本間弘機氏（佐高第二三回、昭和四八年卒）は、松井先生の愛弟子

の田中輝明先生から、大学時代に指導を受けており、お盆休みの帰省時には、是非松井先生が設計された建築物を直接見聞したいと言って、わざわざ獅子ヶ城会館を訪れている。

このように、松井先生に直接、間接にご指導頂き、今尚先生の学風やお人柄を偲ぶ人は後を絶たない。

私も、毎年松井源吾賞の授賞式と講演会、そして記念パーティーにご招待頂き、恐縮している。

大学人の中には、弟子に仕事をさせ、論文発表ともなると、堂々と名前を連ね、世評を稼ぐ方もいるように聞く。

松井源吾賞の趣旨は、全くその逆である。あくまでも愛弟子を伸ばすことに先生ご自身が腐心なされ、弟子達の研究成就のために助成、育成されるもので、それだけに松井源吾賞は、権威があり、受賞対象となるのは、至難の業とお聞きしている。

松井先生が退職金をつぎ込んでこの賞を設立した背景には、もっと深い別の要因があるのかも知れない。

つまり、同じ建築でも、設計と構造とでは、どうも構造の方が分（ぶ）が悪いと、先生は感じておられたのではなかろうかと思われる。

構造は、設計を包含する仕事をしていながら、設計の方が上位に上げられる。官中の新御所（吹上御所）竣工の際も、竣工式では、設計は銀盃、構造の松井先生には木盃が贈られたことに、先生はいたく不満を抱かれていたようである。

それゆえ、構造を専門とする愛弟子達を育成するためにとの、熱い執念みたいなものがこの賞の根底に流れていると、私は直観している。

○平成六年佐渡高校創立百周年記念「獅子ヶ城会館」の設計（七三歳）

佐高同窓会が、松井先生に百周年記念会館設計の依頼をしたのは、先生が、日本建築学会賞を受賞された翌年平成六年のことであった。

「今春、豊原校長先生から、佐渡高校の記念会館の設計の相談があった。先生は真野町出身で、菊竹清訓さん設計、私が構造の「真野町役場」を御覧になって気に入られ、私達に設計を頼みたいということである。作品を見ての依頼ということは、設計者にとって大変光栄で、菊竹さんも快く引受けてくれた。」

（「縞」二一号）

建設用地の選定

松井先生が、記念会館建設用地の選定のために佐高に来られたのは、平成七年早春のうすら寒い日であった。

私が、先生のお宅へお迎えにお伺いすると、玄関先には、既に購入されたばかりの新品の長靴が揃えられてあった。私はそれを見て、先生の、お仕事に対する意気込み、情熱を感ぜざるを得なかった。

佐高へ到着するや、旧男子寮の周辺、登りの遅刻坂右上の土地、そして現校舎西側の古池の周辺を重点的に踏査された。

調査に当たっておられる先生は、薮の中へ深く踏み込んだり、ぬかるみの中を闊歩しながら計測したり、旧男子寮から校庭への三十数段ある石段を草木を分けながら、元気よく登られたそのお姿には、「さすがにプロだなあ」と、私は驚嘆していた。

このようにして精査されてから、先生は、次のように所感を述べられた。

旧男子寮跡は、土地は広いが、湿地。東側には、杉の立木で囲まれ、記念会館からの眺望は良くない。景観を良くするためには、現校舎と同じレベルまで土盛をするか、やぐらを組んで地盤を上げる工法をとることになる。しかし、地震を考慮すると、あまり思わしくない。

遅刻坂の右手上の土地は、景観は良いが、土砂崩れが心配である。

最後に、昔の水泳練習用であった古池の下の小さな畠地は、真野湾が眼下に開け、冬期間は西風が直に吹きつけるが、それなりに四季折々の真野湾の風情を楽しむことが出来る。一応この場所を、候補地としてみてはどうか、参考までに、ボーリングして詳細な地質調査をするようにと言われた。

早速当該地の面積を測定。周囲の環境を写真に収めてこれから直ちに設計に入るとの約束をされて上京なされた。

設計案の検討

間もなく菊竹事務所から第一次案が送付されて来た。

それによると、現校舎西側側面の土地の形に似せた二階建て半地下式の二教室分の建物で、R（丸味を帯びた）の要素を取り入れたものであった。この建物は周辺の自然にも溶け込み、建物が出来ることによって校内の環境をより良くし、丁度同窓生が現役の佐高生を支えている姿としたコンセプト（基本構想）であった。

構造的には、松井先生の中空スラブ（床）工法で行われるため、屋根に当たる部分を軽量化でき、その分だけ柱梁は少なくてすみ、部屋のスペースはそれだけ広く確保でき、建坪の割にはゆったりとした感じがする建物であった。

内部意匠も全体のデザインにふさわしく豪華で、設備、備品もハイカラで、これが高校の施設かと思われるほど、素晴らしい見事なものであった。

しかし、見積られた施工費は、一億円をはるかに超えるものであり、当時の募金の進捗状況からしても到底受け入れられるものではなかった。

実行委員会での話合いの結果、記念会館の贅肉部分をもっとスリム化し、施工費を減額すべきだとする意見が多く、中堀同窓会長と私は、上記の懸案事項を抱いて、設計変更のお願いに上京することになった。

二次案では、建物の建坪は減り、内部意匠も簡素化して来たが、まだまだ施工費は予算をはるかに超えるもので、同窓会長と私は、再度上京して設計変更をお願いし、施工費の減額をして貰うことになった。

この頃、「松井先生は東京の慶応病院に入院されていた。しかも不治の病である。」と、そっと私に聞かせてくれた人がいた。

設計変更のお願いに上京していた時、駅のホームで薬草が販売されており、その中に、ガンに良く効くという見出しの大袋が私の目に止まった。

「これを松井先生に飲んで貰い、早くお元気になって貰いたい」との一心で、私の財布は更に薄くなったが、その薬草を買い求め、先生への心ばかりのお土産とした。

その後先生にお会いした時、先生は「医者に聞いたら南方の有名な薬であると言っていたよ。」と言われ、私は感謝された。

先生がお亡くなりになれてから政枝奥様から、「毎日煎じて飲んでおられた」とお礼を言われた時、「いくら名薬と言えども、記念会館の施工費をもっと安くしてほしいという私たちのお願いから来るストレスの方がずっと大きく、薬草の方は全然効かなかったのではなかろうか」と、私はつくづくそう反省した。

菊竹設計事務所において、菊竹所長が、私たちに、「募金はどの程度集まっていますか、松井先生の母校ですから、できるだけ良いものに仕上げたい。私の母校も九州の有明海の丘の上に位置していて、環境は佐渡高校の場合と同じで、私の母校のように感じていますから。」と、淡々と話されるお言葉に、募金目標達成半ばにも届かぬ状況下でただ施工費を下げてほしいと言っている私たちの胸中の痛みは今も忘れられない。

いやそれ以上に、構造の松井先生と設計の菊竹氏の良きコンビネーションが四十年余りも続いており、お二人は、常に最高の傑作を生み出そうとする意欲に満ちていること、また、松井先生ご自身郷里のために役立とうとするその篤い信念から、この記念事業に対して、多額の寄附をし、その上、建物の材料面では、中空スラブ用の資材等の手配を、積極的になさっている

姿を十分熟知してのお言葉であることを私たちは直感し、「今こそ募金計画を錬り直さなくては」という気持で帰途に就いたのを今鮮明に思い出す。

第三次案が手元に届いた。これを見ると、施工費はかなり減額しているものの、建坪がかなり減って来ており、「これでは使用に堪えない」という意見が実行委員会から出た。

一方、神戸地震直後で、施工者の遠藤建設からは、ボーリングで、地下一五メートル掘っても、砂質泥岩の土質が続く土地柄では、校舎西側を垂直に近い形で削ることはできない、むしろ、正面玄関へ通ずる道を断つことになるが、校舎からゆるやかな傾斜面に造成したいとする計画が提案された。

「募金は停滞気味、記念会館の建坪は減少、正面玄関への道は断つ」、この三重苦の暗雲が、平成七年暮の佐高上空に漂って来た。

古池の土地購入と問題の打開

暮も押し詰まった十二月二十八日、「建設予定地となっている土地を購入して、そこへ第二案の建物を建設することにしてはどうか」と思い、中堀会長に相談して実行委員会に諮って貰うことにした。

早速実行委員会の了承を得て、古池の土地所有者である土田富枝様に実情を率直に話して、「佐高へ古池の土地をお譲り頂きたい」とお願いしたところ、「正月明けに返事します」と約束して下さった。

落着かぬ正月三か日が過ぎ、早速土田様へお伺いして再びお願いしたところ、「教育のためならば」と、一言有難いお言葉を頂き、懸案の土地を譲って貰えることになった。

先祖伝来の尊い土地を教育のためにお譲り頂いたことに、本当に心から感謝している。

これで確実に着工の目途が立った。私たちには、何か暗雲が吹き飛んだような有難い状況になったことを、いち早く松井先生にご報告申し上げることにした。

松井先生にそのお知らせが届いたと思われる頃は、先生がお亡くなりになる一月十一日の数日前の危篤状態の時であり、先生が私たちのお手紙にどうご返事なされたか、お聞きするすべもなかった。

郷里佐渡での松井先生のお仕事

松井先生は、佐渡をこよなく愛し、郷土佐渡思いの方であることは周知のことであるが、先生のお仕事も佐渡では多く見られる。

グランドホテル、真野小学校、真野中学校体育館、真野町役場、金子芳蔵商店そして佐高の獅子ヶ城会館である。

真野町役場庁舎は、菊竹設計の意匠と、松井先生の構造設計の良きコンビの下に、昭和五十八年に竣工したが、工事中松井先生はたびたび来られて、親身になって工事の指導に当たっておられたとのことである。

松井先生は遺言に、「真野町役場庁舎に向けて墓碑を建立してほしい」と言われたそうである。

今、先生は、真野町新町の円静寺の墓地に永眠されており、墓標には、「理深院殿広博日源大居士」側面には、平成八年八月、松井政枝建立、裏面には、先生の業績が刻まれている。

確かに、松井先生のお墓の側に立つと、眼前には、雄々しく聳え立つ真野町役場庁舎があり、そのバックには、大佐渡の山並、就中青野峠が遠望される。

この青野峠の麓には、松井先生の最後の傑作「獅子ヶ城会館」がある。

真野湾を臨む二つの城

真野町役場庁舎と佐高の獅子ヶ城会館は、共に真野湾を臨む景勝の地に建ち、一方は、政治の府として、他方は、学問の府として、

それぞれの雄姿が対峙しているように思える。

これからの佐渡は、他力本願ではなく、真に佐渡に根ざした、佐渡を生かすに足る地域研究と、その成果を確実に具現化させるに足る実行力が必要である。つまり、今ほど、「学問と政治」の血の通った、強力なる結合を大切にすべき時はないと考えられる。

松井先生から諭されること

松井先生は、晩年佐渡へ引き揚げられて、佐渡でお仕事に打込んでおられた。

松井先生の著書に「大架構造建築」という有名な本がある。

先生が木造建築を大切にし、研究を積まれた背景には、新町の松井先生のお宅が、今なお百年単位の齢を以て聳え立っている家屋であり、ここで生まれ育ったことも大いに関係があるものと考えられる。

松井先生はこの家屋について、神戸地震の後、大黒柱や二階及び屋根を支えている柱に懸かる重量計算をして、「真野町新町は活断層が通っていて直下型地震があり得る。その場合は、せん断係数が常時の何倍かになるであろうが、木材の許容応力の安全率は大きいから多分大丈夫だと思う。（「縞」二一号）との研究成果の下に、お宅の建物の中、旧店舗であったところを書斎に改造されて、そこでゆったりと研究やお仕事をなされていた。

松井先生は、東京で仕入れて来られた新情報を研究されて、早速設計の仕事に移され、その作品はお手紙にして真野郵便局へ投函しに行かれていた。

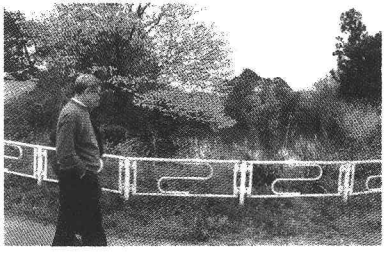
苦心して仕上げた設計書類を運ばれる先生の足取りは全く軽そうに見えた。投函した書類には、世界的に重要な建築の仕事もあり、佐渡から東京の建築事務所へ送り、日々の業務の指示をなされていた。つまり、佐渡に居住していて、東京や諸外国の建築界を動かす仕事をなさっていたのである。

「佐渡には企業が無いから、佐渡に帰ることができない」との言を耳にするが、よく考えて見ると、企業が無いのではなく、本人が先生のレベルまで達していないからなのである。

知識と技術さえあれば、佐渡でゆったりと生活しつつ、日々充実した仕事をすることが可能であることを、松井先生は、実は私たちに教えてくれていたのである。

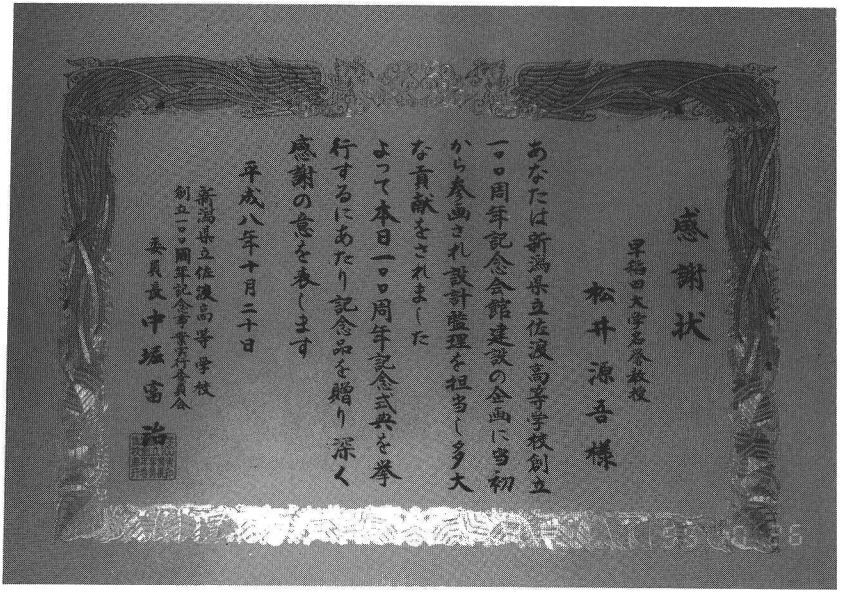
どんな職業でも佐渡へ持ち込むことは可能である。佐渡でいかにその仕事をやり遂げるかは、いかんせん、その人が、頭脳と技術とを兼ね備えており、どんな課題に出合うとも、創造的に問題解決に当たろうとするど根性を持っているかどうかにかかっているのである。

この人間教育の下地となる教育こそ、創立百周年を迎えた佐渡高校において着実に推し進めるべきであると、故松井源吾先生のご業績をひもとくたび諭され、そのように考えさせられるのである。



▶先生が昔泳いだ泥んこの池（現在「獅子ヶ城会館」が建っている）

（佐渡高校同窓会報より）



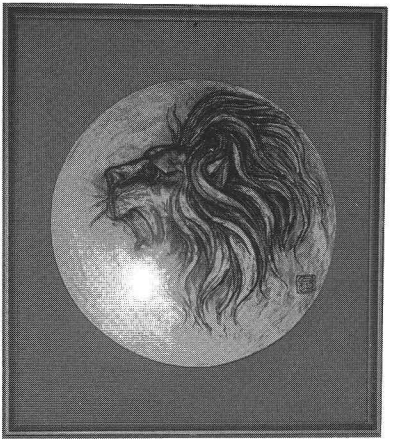
感謝状

早稲田大学名誉教授
松井源吾様

あなたは新潟県立佐渡高等学校創立一〇〇周年記念会館建設の企画に当初から参画され設計監理を担当し多大な貢献をされました
よって本日一〇〇周年記念式典を挙行するにあたり記念品を贈り深く感謝の意を表します

平成八年十月二十日

新潟県立佐渡高等学校
創立一〇〇周年記念事業実行委員会
委員長　中塚宙治



新潟県立佐渡高等学校
創立百周年記念
記念品

レリーフ原型　田中足穂
日展所属・佐渡高校教諭
平成八年十月二十日

佐渡新報

発行所
佐渡新報社
新潟県佐渡郡佐和田町東大通り
〒952-13 ☎(代)0259(57)3434
郵便振替口座 新潟4-12975番
取引銀行 第四銀行佐和田支店
口座番号 普通1034645

コンピューター組版で
文字の大きさ変更・文章の加除
タテ組 ←→ ヨコ組など
ワンタッチOK
最先端技術の
中央印刷
佐和田町東大通り
☎52—3145(代)
FAX57—3475

アミューズメントで「佐渡高校創立100周年記念式典」

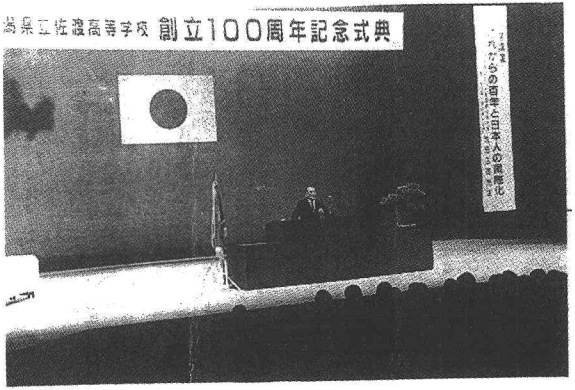
同窓在校生ら約1300人が祝福

席上、獅子ヶ城会館竣工関連で

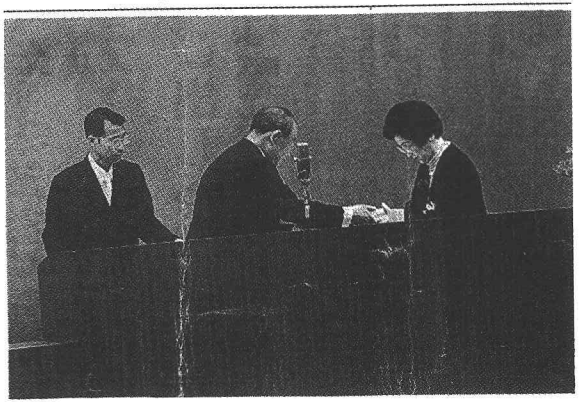
故松井源吾氏夫人や遠藤建設に感謝状

「佐渡高校創立百周年記念式典」が二十日、アミューズメント佐渡に知事代理や県教育長、島内全首長、それに同窓および在校生など一千三百人が列席する中、厳粛かつ盛大に催された。

席上、記念々館設立に寄与した故松井源吾夫人や遠藤建設に中堀同窓会長から感謝状が授与、さらに同窓生・池田正雄氏による記念講演で大きな盛り上がりとなった。



厳かに挙行された記念式典光景



感謝状を授与する故松井夫人

一周忌

97. 1. 11

理深院殿広博日源大居士

第四代松井源吾昭和十八年早稲田大学理工学部建築学科卒業
昭和三十五年工学博士昭和三十六年早稲田大学教授昭和四十
三年日本建築学会賞（作品）平成二年日本光弾性学会賞平成
三年早稲田大学名誉教授平成五年日本建築学会賞（業績）平
成八年一月十一日歿享年七十七正五位勲三等瑞宝章　昭和五
十七年真野町新庁舎の設計に携わる故人の意志によりその方
向に向けてここに眠る

思い出

(95.6.8　建築学会)

6 8

'95 6 8

「六日会」だより

池　平左衛門
（昭和１３年卒）

歴史と伝統を誇るわれらの母校が、今年栄ある創立百周年を迎えるに当たり、僭越ながら六日会を代表してお祝いを申し述べます。

六日会とは、首都圏在住の佐渡中学校出身有志の懇親会であります。

六日会は、昭和二十九年十一月六日に第一回例会を開催して以来、今年まで四十三年間続いている最も歴史の古い同窓会支部の一つではないかと思います。会名は、第一回例会開催日に因んで、当日の会に出席された故北玲吉先輩（佐中第四回卒）の発案で六日会と命名されたものです。

六日会　池平左衛門氏（中央左）と故 松井源吾氏（中央右）
平成７年６月　東京にて

長い間例会は毎年二回開かれておりましたが、数年前から年一回六月の開催になりました。初めの頃は七十歳以上の人達の集まりでしたが、高齢などのため例会の出席者も減り続けたので、徐々に加入年齢を下げて現在は六十歳以上とし、第四十六回卒以上の人達が加入しています。毎会の例会には四十名前後が出席し、ふる里佐渡をなつかしみ、母校を偲び、昔に還って時の経つのも忘れて話に花を咲かせています。第二十回の今年九十四歳の大先輩も元気で出席下さっています。

母校の永遠の発展を、会員一同と共に祈りながら筆を擱きます。

（佐渡高校同窓会報より）

松井源吾先生

田中輝明〔「輝友」(3号・平成8年10月30日) より〕

1996年（平成8年）1月11日、恩師、松井源吾先生は、「理深院殿広博日源大居士」と名前が変わられた。人の世には限りがあるとは云え、哀しい限りだ。

1958年（昭和33年)、大学3年の時に先生に接してから38年になる。

その間の幾多の思い出はつきるところを知らない。ご迷惑をお掛けしたことと、励ましを受けたことが強く心に残っている。

きびしい指導の中にやさしさがあり、判断に迷いがなく、行動力の敏速な先生であった。そんな先生のお姿が、何時も我が道の先にあった。

病につかれたのは昨年の5月である。

4月26日から5月25日まで、ハンガリーのブダペシュト工芸美術館で開かれる「日本の木造建築展」のオープニングで講演をされる予定であったが、その前にされた胸部検査の結果がよくないと、出発前日にキャンセルされた。ブダペシュトへ同行する我々は、とてもがっかりしてしまった。

5月からは病院の人となり、6月16日、肺ガンの手術をされた。大手術であったが悪い処は全部摘出してしまったと聞いている。7月には退院され、その後順調に回復に向かわれていた。

その頃、先生は、執刀医は作家の山口瞳と同じ先生だ、と得意気に話されていた。だが山口瞳は亡くなってしまった。

「彼は手術をしても、悪いところをちょびっとしか取り出さなかったが、俺は全部取ってしまったのだ」

と云って、俺は山口瞳とは違うのだぞ、という意気込みを語っておられた。

10月21日の早稲田大学建築学科の同窓会では、太られて元気もよく、もう

大丈夫と、心配している弟子達を安心させた。秋晴れの理工学部キャンパスで、寿司をつまみ、酒を汲み交わしたのは、まるで嘘のようだ。

11月14日に腰痛を訴えられて、再入院されたのは、ガンが転移した結果だという。以来何回も病院へお見舞に伺ったが、暮の20日過ぎには、益々容体が悪くなり、残念乍ら、私も先行きを覚悟せざるを得なかった。

発病後結婚された奥様との結婚パーティーを正月3日にやろうと、私も準備に躍起になったが、前日の2日、病状から中止せざるを得なかった。

7日の日曜日からは容体が急変し、10日危篤、そして遂に11日午後4時52分、帰らぬ人となられた。

通夜、葬儀は1月18日、19日の両日、上野寛永寺輪王殿で行われた。二日間共、天気は良かったが、冬型気圧配置の寒い日であった。1000人を越す参会者で、先生の偉大さが偲ばれ、先生を送るにはふさわしい葬儀であった。

かねてよりの先生のお言葉に従って、私は司会を務めた。葬儀委員長は建築家の菊竹清訓氏である。

弔辞を聞く間、涙がにじみ出て、厳粛な葬儀の司会を、とちってしまったりした。

葬儀では何時ものことだが、お骨になってしまうと、この世の空しさが、ひしひしと胸にせまる。

その後、しばらくの間、葬儀の夢を見る日が続いた。誰の葬儀だか分からない。先生のような気もするし、私自身のかも知れない。或いは全然別の人のだったのかも知れない。

先生への思いから離れられなくなっていたのだ。

しばらくの間、毎晩酒を飲んだ。

9月22日、お彼岸に松井先生の納骨式があるとの連絡があった。

連休で切符がうまくとれなかったが、何とか都合がついた。元、菊竹事務所にいた遠藤勝勧さんと一緒である。

私が佐渡へ行くのは四度目である。

最初が新潟地震のあった1964年(昭和39年)6月、地震調査の帰りである。

2回目は1979年(昭和54年)3月24日で、「輝友会」10期生の本間弘機君の結婚式の時。私は仲人である。本間君の実家は佐渡の眞野町で、家は先生の処と近い。彼は佐渡高校の出身で、先生の後輩にもあたる。

3回目は1987年(昭和62年)11月13日で、松井先生のお父様の葬儀の時である。

今回、四度目にこんな形で佐渡へ行くとは思ってもみなかった。

お寺へ行く途中、松井先生最後の設計作品となった、佐渡高校同窓会会館の現場へ寄った。丁度、コンクリートが打上がって、これから仕上げに入るところである。

2階建の小さな建物であるが、中空スラブあり、長い片持スラブ、トップライト、スロープ、そして、吹抜けありで、複雑な構造の建物である。

山を背にし、南側は開けていて、屋上からは先生の育った眞野湾の眺望がすばらしい。菊竹清訓先生デザインのこの建物は、立地と建物の形が、バルセロナのガウディの地下聖堂を想い起こさせる。この日の厳粛な気持がそうさせたのかも知れない。

新しく建てられたお墓に先生をお納めした。静寂の中、眞野湾の浜風が吹き抜ける。

1年も経たない内に私の廻りがこんなにも変わってしまうものかと、この世の無情を感じ、力が抜ける想いだった。

帰りは折りからの台風の影響で、船も飛行機も欠航である。

先生の

「お前達帰るな」

と云われる声が風の音に交じって聞こえてくるようだった。

わずかに運航した最終のフェリーで、やっと家にたどり着いた。

佐渡が急に遠くなったような気がした日だった。

(1996年9月30日)

三回忌のあいさつ（リーガロイヤルホテル）

菊竹清訓

松井先生の思い出は私にとって、極めて強烈、鮮明で消えることはありません。

今も先生が扉を開けて、入ってこられるような気がしております。残された者が、どれほどの悲しみに耐えているか、想いは同じと存じます。松井先生を偲んで、印象に残っていることの中から、三つを挙げて、先生の業績の一端に触れさせて頂くことをお許しください。

それは、海上都市、人工土地、そして軸力ドームです。

いま思い返して、改めて言えることは、松井先生がおられたから、プロジェクトを進めることができたということです。言い換えれば、松井先生なしでは設計は行えなかったと思っています。

松井先生のやり方はいつも決まっていて、それはこうでした。社会的ニーズから、私が今こんな構想を考えている、と申しますと、先生はこれを聞かれていて、お別れしたあと、私の知らないところで、深く考えておられたようです。だから、三分構想、三日計画、三年実現と急速でしたが、これが積み重なってはや三十年が経ちました。

例えば、段状の人工土地は、通産省の委託研究で数々の特許を生み、実現の直前です。また海上都市ではフローティングの実験を密かに東京湾で行われていたことは、あまりにも有名です。

また、ドームがそうでした。「軸力ドーム」という概念で、三十年これまでの計画を１本の筋道の上に論文にまとめられていたことに深い尊敬の念を覚えました。これらのことを作品集として、松井先生は出版されております。

中を拝読しますと、いずれもが、解体・組立というメタボリズムの考え方を基盤として、構造的に組み立てられたもののように私には読み取れます。しかも驚くべきことは、木構造の木材資源利用システムの延長上にあったことを著書や日米での構造展で明らかにされました。

私が度々、松井先生を天才的構造家だと言って参りましたのは、単に経済合理性を基に、構造を考え出されただけではなかったということです。新しい構造システムをどう把えるかという点で、圧倒的に創造的な考え方を導かれた数少ない方だったと私は思います。

だから松井先生を建築家だとする、これが理由ですが、スペースを架構的に把え、そこに普遍性があったということから、先生の論理と感性が広範な影響力をもつに至ったのは当然というべきです。

松井賞が、日本の新しい構造分野の優れた方々に出されたことは当然ですが、さらに建築的な洞察力をもった方々が選ばれたことは、特筆されるべきことであり、世界の同じような、ロバートソン、ライス、イスラー氏など、建築界をリードする際だった方々に出されたことが、松井先生の独創的な活動を余すところなく示していると思います。

本日急な出張のため、出席できず誠に申し訳ありません。

お詫び申し上げ、謹んで松井源吾先生の偉業をたたえたいと存じます。

平成9年12月25日

あとがき

永眠の際、皆様方から頂いた心暖まるお言葉までを、最後の縞に集積させて頂きたいと考えておりましたが、２２号と睡蓮に分けることになり、思わぬ時間がかかってしまいました。

２２号は病院で進めていましたが、最後のまとめ方までは聞くことができませんでした。故人が大好きだった縞の締めくくりがこのような形で終わることになり、悲しみを新たにしています。

葬儀、偲ぶ会、納骨、一周忌、三回忌と済ませてまいりましたが、これからも”終わりではない”ということを信じて暮らして行きたいと考えています。

多くの方々の御厚情に対し、心から感謝申し上げ御礼に代えさせて頂きます。ありがとうございました。

１９９８年８月　　松井　政枝

1995年6月8日／建築会館にて

論文が出来そうで考えているときが
もっとも幸福なとき

故松井源吾略歴

1920年6月	佐渡に生る
1943年9月	早稲田大学理工学部 建築学科卒業
1948年12月	早稲田大学専任講師
1952年4月	同助教授
1960年1月	工学博士
1961年4月	早稲田大学教授
1968年5月	日本建築学会賞（作品）
1990年6月	日本光弾性学会賞
1991年4月	早稲田大学名誉教授
1993年5月	日本建築学会賞（業績）
1996年1月	没

睡　蓮　故松井源吾工学博士を偲ぶ　　非売品

発　行　1998年8月　©

編　者　松井政枝

〒171-0022　東京都豊島区南池袋
2-36-1

電　話　03（3984）2747

製　作　株式会社　土木春秋社

〒151-0053　東京都渋谷区代々木
2-26-5

電　話　03（3370）5020